



平成 26 年度文部科学省
大学教育再生加速プログラム (AP)
(テーマ1: アクティブ・ラーニング) 採択事業

福岡工業大学 AL型授業推進プログラム 事業報告書

平成30年度

福岡工業大学

AL 型授業推進プログラム

事業報告書

平成30年度

平成26年度文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）
（テーマⅠ：アクティブ・ラーニング）採択事業

福岡工業大学 AL 型授業推進プログラム 事業報告書

目次

第1章 事業全体の概要	5
1. AL 型授業推進プログラムの概要と目的	6
2. AL 型授業の定義	6
3. 事業実施計画と進捗状況	7
3-1 事業実施計画	7
3-2 進捗状況	8
(1) 第1フェーズ 条件整備 (平成26年度～平成27年度)	8
(2) 第2フェーズ 全学展開 (平成28年度～平成29年度)	9
(3) 第3フェーズ 評価・改善 (平成30年度～平成31年度)	10
第2章 本年度の取組概要	11
1. 教職協働による AL 型授業推進体制の構築	12
1-1 教職協働から教職「学」協働の実施体制へ	12
1-2 FDer (ファカルティ・ディベロップター) の認定基準見直し	13
2. アセスメント・ポリシーの策定	14
3. AL 型授業実施のための教授・学習環境の整備	15
3-1 授業アーカイブシステムの活用状況	15
4. AL 実践事例の調査研究と共有	17
4-1 他大学事例の視察	17
4-2 AL をテーマにした講演会・報告会の開催	18
(1) AL 実践研究会	18
(2) FD 研修会 (FD Café)	19
(3) 新任教員 FD 研修会	20
5. CS (クラス・サポーター) の育成とその活動	21
5-1 CS の雇用	21
5-2 CS の事前研修プログラム	22
5-3 CS の追跡調査	23
5-4 学生による授業改善活動 (学生 FD スタッフ)	25

6. 学習ポートフォリオの活用	26
6-1 学習ポートフォリオの機能と学生への導入指導	26
6-2 学習ポートフォリオの活用状況	28
7. 学習成果指標の策定	31
7-1 主体性のルーブリック	31
7-2 授業外学修時間	33
第3章 取組の成果	37
1. 事業目標に関する達成度	38
2. 成果の測定項目とその分析結果	40
2-1 ALの伸展に伴う成果の測定項目	40
2-2 AL実施状況の経年変化	41
3. 点検・成果公表	42
3-1 学生調査からみる事業の成果	42
3-2 卒業生調査の実施	45
3-3 評価委員会の実施	48
3-4 外部への公表	48
第4章 資料	49
1. 取組広報（平成30年度分）	50
2. 教育技術開発WG活動録（平成30年度分）	52
3. ALテーマ報告会（平成30年度分）	54

1

事業全体の概要

事業全体の概要

1. AL 型授業推進プログラムの概要と目的

本事業の全体の目的は、本学の人材育成目標「自律的に考え、行動し、様々な分野で創造性を発揮できるような人材（実践型人材）」を達成するため、学生の「知識の定着」と「能動的な学習態度の涵養」の実現を図ることである。その方法として、アクティブ・ラーニング（以下、AL）の導入、活用が効果的であるとの知見はキャリア教育充実・強化の活動等のいくつかの試みを通じて学内で共有されてきたが、実践例、ノウハウの共有、効果測定等については十分なものがなく、全学的、組織的な展開には至っていなかった。この主要な原因は、これまでの本学の教育改革では「実践型人材」育成のための制度的枠組みの構築に努めながらも、教育現場での具体的、実的な教授方法を提示しきれていなかったことにある。

そこで、本事業では、教育改革のフレームに「教授方法の質的転換」を加え、その具体的方策として AL 型授業の全学的、組織的な展開を加速的に進めていく。

具体的には、事業期間を通じた実施計画である「AL 型授業推進プログラム」を策定し、AL 型授業の全学展開のため、①教職協働による AL 型授業推進体制の構築、②3つのポリシー改訂、③AL 事例調査・研究、④AL テーマ講演会、報告会、⑤AL 対応「クラス・サポーター」育成、⑥AL 対応教室整備、⑦AL 型授業アーカイブシステム構築、⑧在学生・卒業生アンケート、⑨成果公表の各課題に取り組む。

本事業により、AL 型科目の割合、AL 型科目受講生の割合、AL を行う専任教員の割合のそれぞれを8割まで引き上げる。

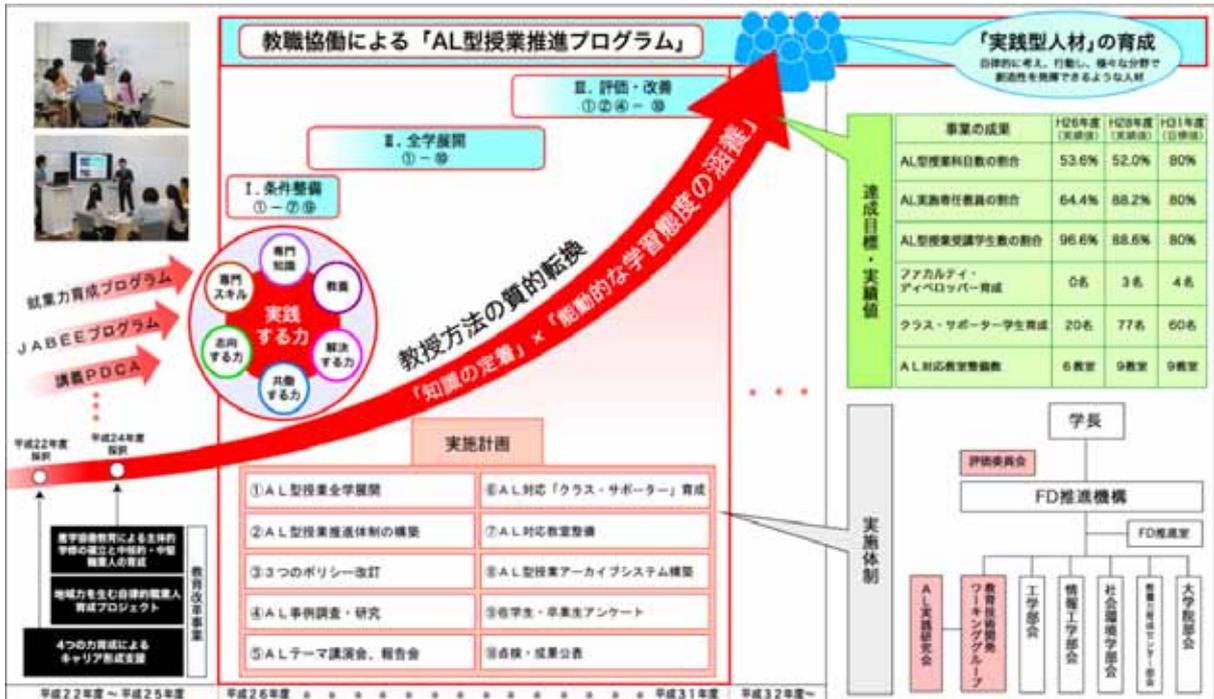
2. AL 型授業の定義

本事業における AL を「学生の知識定着及び能動的な学修態度の涵養を目的として行われる、学生の意見表明及び振り返りを基本的な要素とする授業・学習形態。具体的には、グループ学習、グループディスカッション、体験学習、課題解決学習などを取り入れた授業」として定義し、このような授業を組織的、全学的に展開し、「実践型人材」の育成を図っていく。

3. 事業実施計画と進捗状況

3-1 事業実施計画

本取組にあたって、全事業期間を3つのフェーズに整理し、平成26～27年度である第1フェーズでは物理的な条件整備を、第2フェーズ（平成28～29年度）では全学展開、そして第3フェーズ（平成30～31年度）には評価・改善を主要なテーマとして取り組んでいく。



フェーズⅠ（条件整備）		フェーズⅡ（全学展開）		フェーズⅢ（評価・改善）		事業終了後
平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	平成31年度	
①AL型授業全学展開（AL型対応授業／受講学生数／実施専任教員：いずれも80%）						恒常的なFD活動として アクティブ・ラーニング手法の 推進・評価・改善 継続
②AL型授業推進体制の構築（教育技術開発WG開催／FDer育成／AL実践研究会開催）						
③3つのポリシー改訂						
④AL事例調査・研究（年2校）						
⑤ALテーマ講演会、報告会（年2回）						
⑥クラスサポーター育成（事前研修プログラム：計60名育成）／学生FDスタッフ育成						
⑦AL対応教室整備（計9教室）						
⑧授業アーカイブシステム構築						
⑨在学生・卒業生アンケート（成果測定・分析：年1回）／学習成果指標／学習ポートフォリオ						
		⑩成果公表 （論文5件、実践報告10件）		⑪成果公表 （論文5件、成果報告10件）		
⑫評価委員会（年2回）						

3-2 進捗状況

(1) 第1フェーズ 条件整備（平成26年度～平成27年度）

第1フェーズにあたる平成26年度～27年度の目的は、AL型授業の全学展開の環境を整えていくことであった。教育技術開発ワーキンググループ（以下、教育技術開発WG）を中心に、ALをテーマとした講演会や報告会を開催することによりAL型授業導入に関する心理的障壁の引き下げを図る他、AL対応教室に必要な設備・備品について検討、整備を進めるとともに、クラス・サポーター育成に着手、授業アーカイブシステムの運用開始など、物理的・人的条件整備を行った。

項目	取組概要（平成26年度～27年度）
1. 教職協働によるAL型授業推進体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・教育技術開発WGの毎月開催 ・ファカルティ・ディベロッパの育成検討（H27）
2. 3つのポリシー改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・ディプロマ・ポリシー（DP）、カリキュラム・ポリシー（CP）の改訂（H26） ・DP・CPの再検討とアドミッション・ポリシー（AP）の改訂審議（H27）
3. AL事例調査・研究	<ul style="list-style-type: none"> ・他大学の先行事例の訪問調査（H26：3校、H27：3校）
4. AL講演会・報告会	<ul style="list-style-type: none"> ・ALをテーマとしたFD研修会の開催（H26：3回、H27：3回） ・AL実践研究会の発足（H27）
5. クラス・サポーターの育成	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス・サポーター（CS）の試行（H26）、導入（H27） ・CS育成プログラムの開発（H27）
6. AL対応教室の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・AL対応教室の整備（H26：3教室、H27：1教室）
7. 授業アーカイブシステムの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・授業アーカイブシステムの導入（H27） ・授業アーカイブをテーマとしたFD研修会の実施（H27）
8. 学習成果指標の策定（在学生・卒業生アンケート）	<ul style="list-style-type: none"> ・成果指標の策定（H26） ・AL導入科目実施状況調査実施、アンケートシステムの整備 ・ジェネリックスキルの測定（H27） ・在学生アンケート調査実施（H27）
9. 成果公表	<ul style="list-style-type: none"> ・評価委員会の年2回開催 ・ホームページ、リーフレット、事業報告書の作成・配布

(2) 第2フェーズ 全学展開 (平成28年度～平成29年度)

第2フェーズの目的は、AL型授業の全学展開を具体的に進展させることである。教育技術開発WGを起点として、これまでの取組であるAL事例調査・研究、AL講演会・報告会、CS活用、授業アーカイブシステム活用を進める他、ファカルティ・ディベロッパーの育成・認定を行った。

項目	取組概要 (平成28年度～平成29年度)
1. 教職協働によるAL型授業推進体制の構築	<ul style="list-style-type: none"> ・教育技術開発WGの毎月開催 ・ファカルティ・ディベロッパー認定 (H28: 3名、H29: 2名、計5名) ・AL実践研究会の開催 (H28: 2回、H29: 1回)
2. 3つのポリシー改訂	<ul style="list-style-type: none"> ・アドミッション・ポリシーの改訂 (H28)
3. AL事例調査・研究	<ul style="list-style-type: none"> ・他大学の先行事例の訪問調査 (H28: 2大学、H29: 3大学)
4. AL講演会・報告会	<ul style="list-style-type: none"> ・ALをテーマとした講演・報告会 (H28: 4回、H29: 2回)
5. クラス・サポーターの育成	<ul style="list-style-type: none"> ・CSの雇用とCS事前研修の実施 (H28・H29) ・学生による授業改善活動実施 (H29)
6. AL対応教室の整備	<ul style="list-style-type: none"> ・AL対応教室の整備 (H28: 2教室、H29: なし)
7. 授業アーカイブシステムの活用	<ul style="list-style-type: none"> ・授業アーカイブシステムを活用した反転授業の実施 ・授業アーカイブをテーマとしたFD研修会実施 (H28: 1回、H29: 1回)
8. 学習成果指標の策定	<ul style="list-style-type: none"> ・AL導入科目実施状況・受講学生数の調査実施 ・ジェネリックスキルの測定 (H29)
9. 点検・成果公表	<ul style="list-style-type: none"> ・「評価委員会」を年度内に2回開催 ・中間成果報告会 (H29) ・ホームページの改訂、リーフレット、事業報告書の作成

(3) 第3フェーズ 評価・改善（平成30年度～平成31年度）

第3フェーズでは、それまでの取組をもとに成果を点検・検証し、取組の改善につなげるとともに、事業期間終了後の取組継続に向けた体制を整備する。

本年度（平成30年度）の目的は、AL型授業の全学展開の取組を継続するとともに、本事業のこれまでの取組の成果に関する評価を踏まえ、計画の改善と再整理を行うことであり、具体的には、引き続き「教育技術開発WG」を起点として、FDerを中心にAL事例調査・研究、AL講演会・報告会、クラス・サポーター活用、学生FDスタッフによるAL型授業の改善、授業アーカイブシステム活用を進めるとともに、卒業生調査の実施、前年度より着手した学修成果の評価指標の策定の推進、学習ポートフォリオの運用を行う。取組の評価・改善については、平成29年度に実施した「中間成果報告会」および「中間評価」における指摘はもとより、それまでの在学生アンケート・卒業生アンケート実施結果や評価委員会の指摘を踏まえた検討を行う。

項目	取組概要（平成30年度）
1. 教職協働によるAL型授業推進体制の構築	・教職協働から教職「学」協働の実施体制へ ・ファカルティ・ティベロツパーの認定基準見直し
2. ポリシーの整備	・アセスメント・ポリシーの策定
3. 授業アーカイブシステムの活用	・授業アーカイブシステムの活用促進
4. AL事例調査・研究	・他大学の先行事例の訪問調査 ・ALをテーマにした講演会・報告会の開催
5. クラス・サポーターの育成とその活動	・CSの雇用 ・CS事前研修プログラム ・学生による授業改善活動（学生FDスタッフ）
6. 学習ポートフォリオの運用	・学習ポートフォリオの機能と学生への導入指導 ・学習ポートフォリオの活用促進
7. 学習成果指標の策定	・AL導入科目実施状況・受講学生数の調査実施 ・主体性のルーブリック ・授業外学習時間
8. 点検・成果公表	・「評価委員会」を年度内に2回開催 ・卒業生調査の実施 ・ホームページの改訂、リーフレット、事業報告書の作成

第 2 章

本年度の取組概要

2

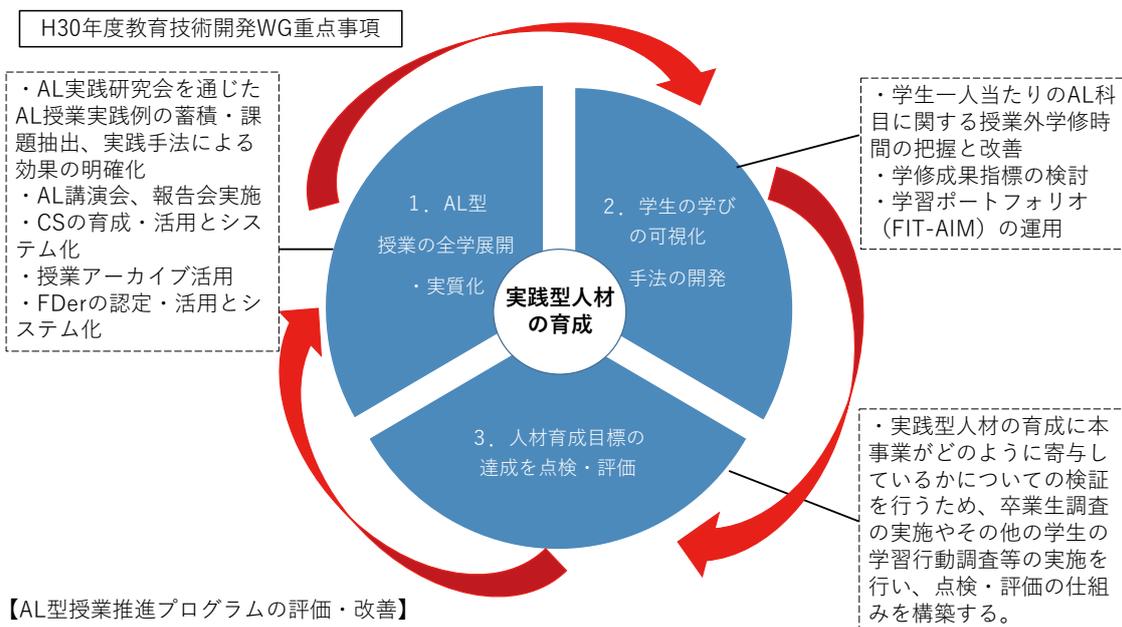
本年度の取組概要

本年度の取組概要

1. 教職協働による AL 型授業推進体制の構築

1-1 教職協働から教職「学」協働の実施体制へ

平成26年10月、FD 推進機構のもとに教職協働組織である教育技術開発 WG が設置され、以降、AL 導入促進の主体として、FD 推進機構各部会から報告される実施状況・成果の分析、学内講習会開催、事例調査・視察の計画や振り返りを行い、FD 推進機構運営委員会で報告を行うとともに、得た知見を学内に水平展開することを目的に活動を行った。しかしながら、AL 導入のさらなる進展のために、実際に授業を実施する教員間における授業実践例ならびにその成果についての情報共有や、授業実施上の課題に関する連絡協議の場が必要であるとの認識を持つに至り、平成27年2月、授業実施者による「AL 実践研究会」を、教育技術開発 WG 下に設置し、実践例の蓄積と課題の抽出を行うこととした。また、平成28年度より、WG 構成員の見直しを行い、各学部委員を各部会長（学部長）に変更するとともに、授業実施代表者として学部代表4名を加え、授業実施者と推進組織との密なる連携を図るものとした。また、平成29年度からは、教職「学」協働の実施体制への移行を目指し、学生 FD スタッフの会議への参画を開始した。平成30年度は、学生 FD の活動報告として学生 FD スタッフ3名が会議に参加（平成30年10月30日）、独自に行ったアンケート結果から、本学学生が自らの学習意欲を喚起する授業方法は、「体験」できる AL 型授業であると感じていること、学習内容に関する科目間の繋がり の例示、具体的に学んでいる内容がどのような実用性を持つものかについての説明も有効であると感じていることなどが報告され、これについて、教職員と



学生での意見交換を行った。

また、中間評価の結果を踏まえ、教育技術開発 WG の本年度の重点事項を定め、取組の方向性を、実質化・可視化・点検評価の3つに整理し、改善のサイクルを回しながら推進していく体制を整えた。

1-2 FDer（ファカルティ・ディベロッパー）の認定基準見直し

本事業では、AL型授業に先駆的に取組む教員を「ファカルティ・ディベロッパー（以下、FDer）」と位置づけ、ALの全学展開をリードし、本学の教授法の質的転換の実現の先導役となることを期待役割として認定する取組を行っており、平成30年度は1名を認定した。



2019/ 1/15 認定証交付式

FDerの役割は、新たにALに取り組む教員の動機づけとなり、第2フェーズである全学展開の局面において、その存在は大きなものとなった。本学におけるFDerの認定要件は「AL型授業を先導的に実践し、その知見を一般化、体系化して共有、展開することができる者」・「本学の教育改善に資する指定された2つ以上の研修を修了した者、または同等以上の能力を有する者」・「自らの教育力を高めるとともに、本学の教員や組織の教育力を高める継続的な支援の経験を有する者」の3つの要件をすべて満たした教職員を認定するものとし、活動については年間10万円の予算措置を行っている。要件の一つとしている「教育力向上の支援」については、学内で実施するALテーマ講演会、報告会において自身の実践事例を報告する以外にも、参加した研修プログラムでの知見を活かし、新任教員FD研修会など、学内研修会におけるファシリテーター役を務めることや、学生の学修成果に係るデータをALの効果検証のために分析するといった内容が含まれている。FDerの活動の拡がり、本学におけるFD・SD活動の進展につながるものとなっており、今後は認定基準に教育改革への貢献度評価を含む方向で見直しを行い、教員の動機づけを強めていく計画である。

本年度は認定基準見直しの一部として、認定要件や業務・役割等についてこれまでの申し合わせをより具体化する議論が行われた。新たな認定要件では「具体的活動」を明示し、FDer認定対象者が職務にふさわしい経験、意欲、知識を有しているかが判断できるものとするとともに、その業

務、役割についても明確化を図った。さらに、学内における教育活動上の実績として明確化するため、学内で実施している「業績評価加点項目（表）」の新規加点項目として位置づけし、教員の業績として明確に組み入れることについて議論を行っているところである。

【福岡工業大学における FDer 認定要件】 2018/10/30教育技術開発 WG

実施要件	実施のレベル	具体的活動	必要数
AL実践	AL型授業を先導的に実践し、その知見を一般化、体系化して共有、展開することができる	AL型授業の2年継続実施	2つ以上
		FD7-コアレポート、教育関連論文の投稿実績	
		自身のAL型授業の公開歴あり	
		ACCWG委員を1年以上歴任	
FD研修	本学が認める教育改善に資する2つ以上の研修を修了、または同等以上の能力を有する	※同等以上の能力 教育学、教育工学等の知見（ACC WG長判断）	-
教育支援	自らの教育力を高めるとともに、本学の教員や組織の教育力を高める継続的な支援の経験を有する	学内でのFD研修会に2年継続して2回以上参加	2つ以上
		FD推進室後援の学外FD研修に3年以内に参加歴あり	
		学内での研修で3年以内に講師経験あり	
		学部（教養力育成センター）FD委員経験3年以内にあり	

【FDer の業務・役割】 2018/10/30教育技術開発 WG

区分	実施内容	具体的活動	意義・目的	
AL実践	公開授業	-	さらに改善した授業内容を広く知らしめる	◎
	執筆・投稿	FD7-コアレポート、その他論文集など	実施事例や改善内容などを分析的に伝える	任意
教育支援	企画・開発	FDerミーティング（各期1回 年2回）	現状のFD活動（特にAL実践）についての現状を確認し、課題抽出や改善策の提案を行う 全学でのFD研修のテーマ、内容の決定や自らを含め講師・ファシリテーターの選定を行う	◎
		AL実践研究会（年2回） FDcafé（年2回以上）	本学でのALの実践事例や効果ある実施方法、ツールなどについて講義やWSを実施 ALに限定せず、授業改善、教育改善に関して講義や実践型のWSを実施	就任後2年まで年1回以上
	研修講師・ファシリテーター	新任教員FD研修会（年2回）	ALの実践をテーマとしてWSを指導、期末のフォロー研修も主導	
		非常勤講師オリエンテーション（年2回）	プログラム内WSにてAL推進や本学の教育改善法などについてファシリテート	
		学部FD研修会・講演会 SD研修会	学部FD部会と連動して、学部ニーズに沿った講演・研修会を企画、主導 現在の高等教育の動向と本学の取組み、ALの進展などについて職員にも情報共有	
	コンサルティング	個別教員の要望に対応	個別教員の要請に応じて、授業全般の改善（内容、目的、手法、評価）などを指導	任意
	その他	学外対応	来訪者対応	本学のALの取組みについての調査来訪者（他大学、企業・団体など）への対応
学生指導		クラス・サポーター（CS）指導	CS合宿・研修に主管教員と同行、特に専門科目についての考え方やファシリテーション法を指導	毎回1名
	FIT-JOIN指導	FIT-JOINの活動状況を定期的に聴取、活動の方向性などをアドバイス	1名主管	
FD研修	学外研修受講	FDerとして必要な最新知識や知見を修得するために本人希望ないしFD推進機構指定研修に派遣	1～2名指名	

2. アセスメント・ポリシーの策定

これまでの取組の中で、本学では、3つのポリシーに基づく教学マネジメントの確立とALの全学展開による教育の質的転換の取組を推進してきた。3つのポリシーは平成29年4月から策定・公表が義務付けられ、特にディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーについては、体系的で組織的な教育を実施するための目標や評価（アセスメント）基準として機能すべく要請されていることから、本学でもその視点で見直しや確認を行い、各学科のカリキュラム・ポリシーに「学修成果の評価の在り方」について記載を加えるなどの改訂を行った（平成29年4月実施）。しかしながら、本学がこれらのポリシーに基づいて、大学教育の質保証に向けたPDCAサイクルをより適切に機能させるためには、個々の学生の学修成果および教育プログラム全体の教育成果を可視化し、全学共通の考え方や尺度（アセスメント・ポリシー）によって評価し、その結果を改善につなげる必要がある。そこで、成績評価を含む個々の学生の学修成果を測るものから教育プログラム単位でディプロマ・ポリシーの達成を測るものまでの全学共通の評価の考え方を、本学のアセスメント・ポリシーとして明確化し、さらなる教育の質向上に資するものとするため、平成30年度を通じて全

学的な検討を行い、平成31年4月にアセスメント・ポリシーとして制定、公表するとともに、それに照らしたアセスメントを試行的に実施することとなった。また、アセスメント・ポリシーとともに、「成績評価ガイドライン」を策定、成績評価の基準を統一することによって、評価の客観性と適切性を担保し、教育の質保証を図ることとした。同ガイドラインには、ディプロマ・ポリシーを知識・能力・態度といった性質ごとにカテゴリ化し、それぞれに対応する達成目標を評価するための課題と評価の方法を例示するとともに、特に本取組で育成しようとする「能動的学修態度（主体性）」をルーブリックとして示し、評価の参照とする内容を含むものとした。これらの内容は本事業での取組成果が活かされたものであり、本学の人材育成目標の達成に向けて、本事業が寄与する点であるといえる（主体性のルーブリックに関する詳細は P.31～33参照）

3. AL 型授業実施のための教授・学習環境の整備

3-1 授業アーカイブシステムの活用状況

本取組では、第1フェーズである平成27年度後期から授業アーカイブシステムを導入し、学生の振り返り学習や反転授業の事前学習としての利用、およびモデル授業のFD研修コンテンツとしての活用を行っている。平成30年度の利用実績は下記のとおりである。

【授業アーカイブ利用実績】

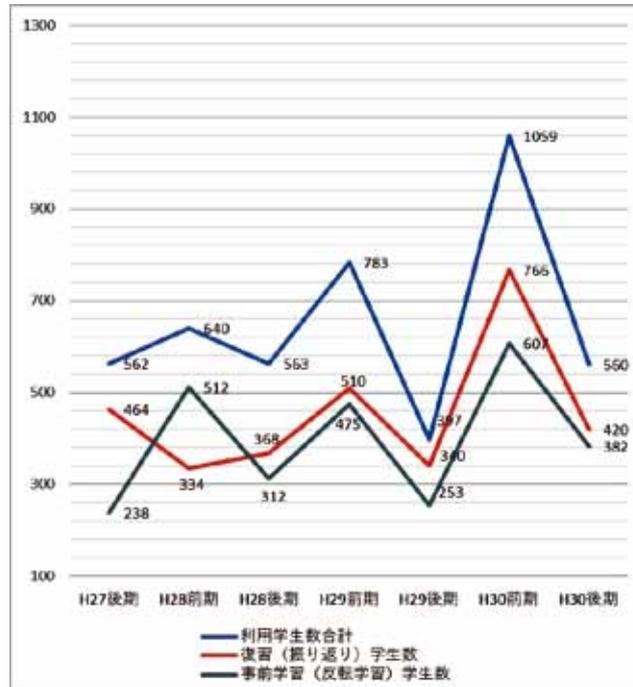
	H27実績		H28実績		H29実績		H30実績	
	後期	前期	後期※	前期	後期	前期	後期	
授業アーカイブシステム利用 学生数（実数）	562	640	563	783	397	1,059	560	
復習（振り返り）学生数	464	334	368	510	340	766	420	
事前学習（反転学習）学生数	238	512	312	475	253	607	382	
授業アーカイブシステム利用 授業数（コマ数、科目数）	153、20	123、15	89、21	164、18	75、15	212、21	100、15	
うち、復習もしくは事前学習利用 授業数（コマ数、科目数）	151、16	122、14	83、16	163、17	69、11	210、19	96、13	
復習（振り返り）用	129、14	85、12	45、13	109、13	46、10	141、15	56、10	
事前学習（反転学習）用	22、2	49、5	38、3	73、7	34、3	120、10	51、5	
授業アーカイブシステム利用 平均視聴時間総合（hh:mm）	5:19	3:20	3:05	3:38	3:32	4:13	4:24	
復習（振り返り）用	5:22	2:52	1:24	4:03	2:22	2:45	2:22	
事前学習（反転学習）用	4:53	3:47	4:46	3:12	4:43	5:41	6:27	

※平成27実績は後期のみ

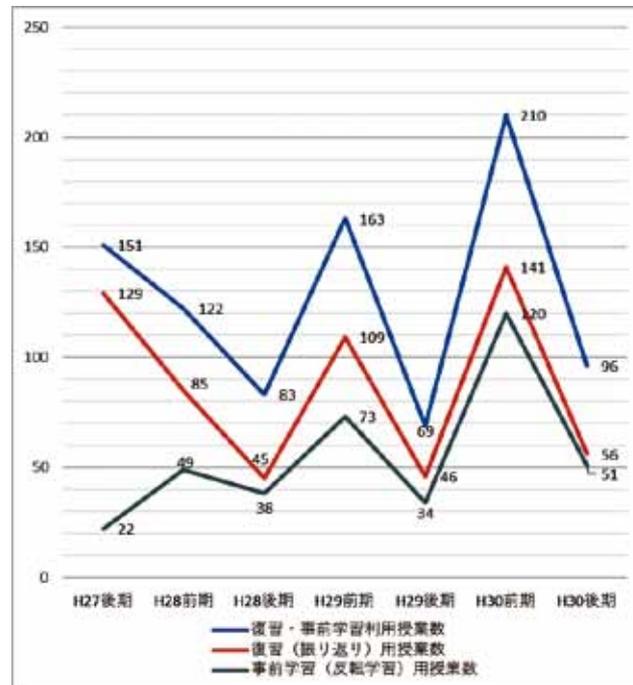
利用状況の特徴としては、振り返り学習 + 反転学習者（H30前期実数1,059名、後期実数560名）、平均視聴時間総合（同前期4時間13分、後期4時間24分）、学生一人当たり平均視聴時間（同前期6時間39分、後期7時間48分）という状況であり、試験が近い期間に視聴率が伸びる傾向があった。反転学習用にはパワーポイントなどのPC画面をキャプチャーした資料、振り返り用には板書の映像資料などの利用例が多くあり、資料作成方法や動画時間など先生方の創意工夫が見受けられる。また、授業アーカイブシステムが導入された平成27（2015）年度後期以降の経年での利用状況を確認

認したところ、後期に比して前期の利用が多い傾向にあること、直近1年間は、振り返り学習に比して反転学習の利用平均視聴時間が長い傾向にあること等が確認された。

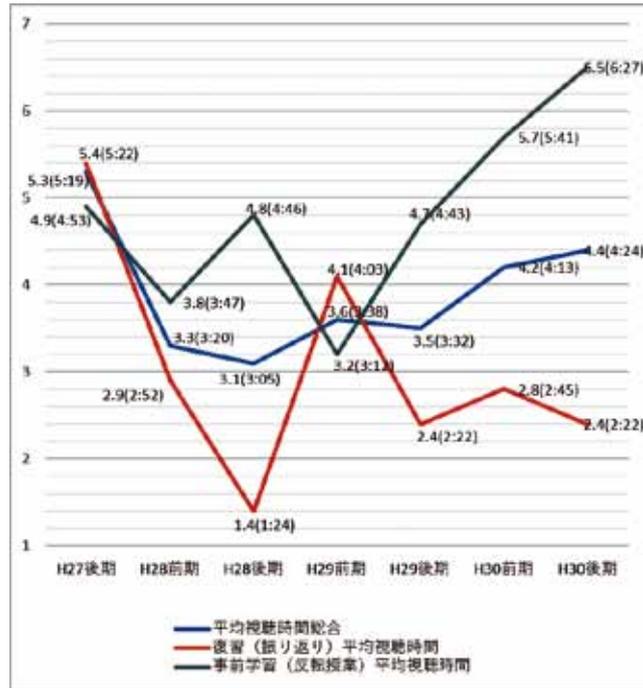
【授業アーカイブシステム利用学生数（実数）】



【復習・事前学習利用授業数（コマ数）】



【利用平均視聴時間】



4. AL 実践事例の調査研究と共有

4-1 他大学事例の視察

本取組では、ALに関する優れた先行事例を有する国内の大学に訪問調査を行い、ALの実施環境や教育方法、ALの成果を測る具体的方法や指標について把握することにより、本学におけるAL全学展開に資することとしている。本年度は、特に事業成果をどのように点検・評価するかという視点を踏まえるため、学修成果の可視化方策の検討イメージを得ることを目的として、訪問調査を行った。

- 宇都宮大学（テーマⅠ・Ⅱ複合型）
 テーマ：ALの深化・拡充、学習成果の可視化
 日時：2018年11月29日（水）
 訪問者：職員1名（FD推進室 次長）



宇都宮大学における学修成果の可視化については、人材育成目標である3C精神（Challenge, Change, Contribution）を3Cチェックシートという形で具現化されている点が大変参考となった。本学での議論では、ディプロマ・ポリシーにける主体性を授業科目内でどのように評価し、その成果を可視化するかについて検討しているが、宇都宮大学においては、ディプロマ・ポリシーと直接結び付けられない形で汎用的能力の評価を行う形で実施しており、教員の抵抗感の払拭や汎用的能力の育成の重要性の理解の促進につながるのではないかという認識を持った。

4-2 AL をテーマにした講演会・報告会の開催

本取組では、随時 AL をテーマとした講演会・報告会を開催し、学内教職員を対象に AL に関する授業実践例ならびにその成果についての情報共有や、授業実施上の課題に関する協議の場として授業実施者による実践例の報告と課題の抽出を行っている。本年度の実績は以下のとおりである。

（内容の詳細は、「第4章 資料 3. AL テーマ報告会（平成30年度分）」参照）

(1) AL 実践研究会

●第6回 AL 実践研究会 2019年2月25日

テーマ：教養力育成科目における AL 実践とその効果

発表者：社会環境学科 中野美香 准教授
社会環境学科 樋口貴俊 助教 他

参加者：32名（教員23名、職員9名）

教養力育成科目における AL 授業の実践報告をするとともに、その教育効果や専門教育への繋がり等について議論が行われた。

●第7回 AL 実践研究会 2019年3月4日

テーマ：新任教員ピア授業参観振り返り

進行役：社会環境学科 藤井洋次 教授（FDer）
報告者：電気工学科 松尾敬二 教授（教育技術開発 WG 長、FDer）

参加者：15名（教員11名、職員4名）

新任教員を対象に、反転授業の実践とその成果についての授業実践例紹介が行われ、また後期講義の振り返りと今後の授業改善についてのワークが行われた。

第6回 AL実践研究会
「教養力育成科目におけるAL実践とその効果」

日時：2019年2月25日(月) 13:00~14:30
場所：E棟3階 Cultivation Site R1講義室

【概要】
2018年4月から実施している教養教育カリキュラム「教養力育成科目」においては、「全学共通」「教養力育成」「アクティブ・ラーニング」を基本的な考え方としている他、基礎科目では学部学科混成のクラス編成を行い、異分野での交流を通して大学での学びの幅を広げる取組を行っています。本カリキュラムにおける授業実践を報告するとともに、その教育効果や専門教育への繋がり等について、参加者で議論する場といたします。

【プログラム】
1. 開会挨拶（教育技術開発WG長 松尾敬二 教授）
2. 教養力育成科目のカリキュラム概要について
（教養力育成センター長 阿山光利 教授）
3. 授業実践報告：
① 「知と教養」(社会環境学科 中野美香 准教授)
② 「Advanced English」(英語教員WG)
③ 「ウェルネス基礎」(社会環境学科 樋口貴俊 助教)
4. 質疑応答・全体議論

【申込方法】
2月20日(水)までにメールにてお申し込みください。
Eメール： al@u.tsukuba.ac.jp

(2) FD 研修会 (FD Café)

FD 研修会 (FD Café) では、外部有識者 (大学教育関係者を問わず) を招聘し、外部の知見を取り入れて教職員の AL に対する理解を深めている。本年度は、主に学修成果の評価に関するテーマを取り上げて開催した (内容の詳細は「参考資料」FD Café を参照)。また、昨年度からは、学生と授業改善をテーマにした教職員の意見交換会についても FD café として企画を行っている。

●第14回 FD Café 2018年6月18日

テーマ：授業外の学修について話をしよう～教職員 & 学生懇話会～

ファシリテーター：情報工学科 山澤 一誠 教授

参加者：29名 (教員9名、学生8名、職員12名)

教職員・学生で、授業外学修の「位置づけ・目的」、授業外学修について「する理由・しない理由」、FDとして「授業の改善 (教員側)・その他の改善 (学生・大学設備)」についてそれぞれグループでディスカッションを行った。

学生側からは、授業外学修の重要性について、教員の考えが分かったという意見、教員側からは大切なのは『学生の心構え (マインドセット) の変革』であり、授業がおもしろい、役に立つと思うことができるような授業にするために授業の目的を常々伝えることや宿題やレポートをどこまでやればよいのか明確なハードル設定が必要である、AL 型授業とこの心構えの変革の接点について、引き続き教職員や学生と検討していきたいといった議論が行われた。

授業外の学修について話をしよう
～ 教職員 & 学生懇話会 ～

AL型授業では、限られた授業時間内で学びを深めるため、模範学習のように、事前の講義内容の理解やディスカッションを行うためのリサーチなど授業外学修の重要性が高まっています。また、大学設置基準では授業時間の2位の学習時間を確保することで、授業内容が修得できると設定されており、単位の履修化においても学生に授業外の学修を促す授業設計が求められています。

そこで、学生が授業外学修の重要性をどう捉え、どう取り組んでいるのか、学生と教職員との相互理解を深め、本学のAL型授業のあるべき展開を模索します。

FD Café 開催

日時：2018年6月18日(月)
16:30～18:00

場所：E棟3階 FDセミナー室

プログラム

- 開会挨拶
教育技術開発WG長 松尾聡二 教授
- グループワーク(意見交換)
ファシリテーター：情報工学科 山澤一誠 教授
- 閉会挨拶

対象者：参加を希望する教職員・学生FDスタッフ及び参加を希望する学生

申込方法：参加希望者は6月15日(金)までにメールにてご連絡ください。
FD推進室：o-fd@fkit.ac.jp

●第15回 FD Café 2018年10月12日

テーマ：ルーブリックを活用した学修評価

～主体性の育成に着目して～

講演者：芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター / 工学部 榊原 暢久 教授

参加者：28名 (教員21名、職員7名)

講演およびワークショップを通して、ルーブリックの利点として、学生の評価に関する行動指針が明確になること、学生が自らの学習活動を評価できること、結果だけでなく、プロセスも評価できること、評価の負担が少なく採点時間が短縮できる一方で、詳細なフィードバックが可能になること、採点に係る教員のストレ

平成26年度大学教育再生加速プログラム採択事業

FD Café
ルーブリックを活用した学修評価
～主体性の育成に着目して～

【概要】高等教育においては、「何を教えたか」から「何を学んだか」というパラダイム転換の必要性が言われ、成績評価についても多様な評価基準を設定することが求められています。本学においても、ディプロマ・ポリシーに定める要素として能力・態度が含まれており、その育成を各授業科目において担っています。本プログラムでは、成績評価の目的・意義から出発して、特に能力・態度の評価に深く関わるルーブリック評価についての基本的な考え方を理解し、ルーブリック評価表作成の基本を身につけることを目的とします。

日時：2018年10月12日(金)
16:30～18:00

場所：福岡工業大学 E棟3階 R1講義室

講師：
榊原 暢久 先生
(芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター / 工学部 教授)

★ルーブリック作成のワークショップを行います。
当日は筆記用具をご持参のうえご参加ください。

主催：福岡工業大学FD推進機構教育技術開発WG

スの軽減につながるなどが確認された。

また、ルーブリック評価の背景と評価に関わる要点、ルーブリックの基本事項、実際の作成手順と観点・基準設定時のポイント、ルーブリック評価の利点について学び、またワークで実際にルーブリックを作成することで、参加者の担当科目でのルーブリック導入・活用に向けて弾みとなる場となった。

●第16回 FD Café 2018年12月17日

テーマ：成績評価の客観性および厳格化について

～ガイドラインとアセスメント・ポリシーの策定～

講演者：筑波大学 教育研究センター 田中 正弘 准教授

参加者：28名（教員17名、職員11名）

厳格な成績評価を実施するにあたり、成績評価ガイドラインとアセスメント・ポリシー策定の重要性和背景について講演があり、本学のそれらの検討状況について、成績評価ガイドラインの中でルーブリックを設定し、主体性の評価に取り組もうとしている点、アセスメント・ポリシーについて、「機関（大学全体）レベル」、「教育課程（プログラム）レベル」、「科目（授業）レベル」に加えて「学生」レベルが設けられている点について、独自性が評価され、今後の検討に向けた貴重な機会となった。

FD Café

成績評価の客観性および厳格化について
～ガイドラインとアセスメント・ポリシーの策定～

【趣旨】
大学教育の大衆化に伴い、専門的知識の獲得だけでなく、主体性や発想力、プレゼン能力などが社会的に求められるようになってきました。これらの社会的要請から教育の質の転換が求められ、教育の質を評価して客観的に示すことも併せて求めています。そこで、教育の質保証の基本となる成績評価について、その評価の妥当性と信頼性の向上に何が必要かを知り、本学における組織的な評価体制の在り方について考える機会と致します。

【日時】 2018年12月17日（月）16:30～

【場所】 福岡工業大学 E棟3階 R1

【講師】
筑波大学 教育研究センター
准教授 田中 正弘 先生

講師プロフィール
ロンドン大学教育研究所 (Institute of Education, University of London) 博士課程修了、PhD in Education (筑波大学高等教育研究開発センターCOE研究員、鳥取大学教育開発センター専任講師、筑波大学21世紀教育センター准教授を経て現職)。専門領域：比較教育学・異文化教育論

【お問い合わせ先】
FD推進室 g-fd@fju.ac.jp

(3) 新任教員 FD 研修会

着任後3年以内の新任教員を対象に、AL型授業をはじめとする授業改善に取り組んでもらうことを目的に、グループディスカッション形式により教職員で意見交換を実施している。

●2018年度新任教員 FD 研修会 2018年9月13日

対象者：2018年度新任教員10名

参加者：22名（教員16名、職員6名）

内 容：

1. アクティブ・ラーニング授業事例紹介（社会環境学科 藤井洋次 教授 FDer）
2. グループワーク「前期講義を振り返っての気付き」
3. 相互授業参観について



5. CS (クラス・サポーター) の育成とその活動

5-1 CS の雇用

本事業では、AL 導入科目についてクラス・サポーター（以下、CS）と称する先輩学生を雇用し、AL 型授業の効率化を図っている。CS には対象科目の受講経験のある学生のうち優秀な者から、教員を補助し、授業内外における少人数によるグループ学習のファシリテートやピアラーニングを促す知識・技能を一定程度有し、さらには ICT 機器にも習熟した学生を育成、雇用するもので、対象科目の受講学生はもちろん、CS 自身の学習深化にも繋げることを目的としている。今年度においても、雇用科目の定着が進み、継続的な実績の伸びを示している。

【CS 雇用実績】

	H26試行	H27実績	H28実績	H29実績	H30実績	H31
CS 導入科目数	8	24 (専門21、教養3)	29 (専門26、教養3)	31 (専門28、教養3)	32 (専門27、教養5)	—
CS 導入授業数	11	66 (専門36、教養30)	77 (専門45、教養32)	81 (専門49、教養32)	97 (専門53、教養44)	—
のべCS数(名)	35	123	140	137	195	—
実CS数(名) 【目標】	20	72 —	77 【40】	75 【50】	78 【60】	— 【60】

受講生の視点から CS 雇用の成果を示すものとして、全科目に実施している授業アンケートにおいて科目の意義を問うた平均評価ポイント（4.0点満点）を全科目と CS 雇用科目の平均値を比較したところ、CS 雇用科目のポイントが高くなっている他、学修時間の平均値も高く、CS が授業のファシリテートやピアラーニングの促進を行うことにより、受講生の学びに良い影響を与えていることが確認できた。

【CS 雇用授業と授業アンケートと平均評価ポイント・平均学習時間】

		授業数	評価ポイント 平均	学習時間 平均
2016(H28)年度	CS雇用授業	77	3.40	51
	CS雇用授業(専門科目のみ)※1	45	3.38	62
	全体※2	1,498	3.30	52
2017(H29)年度	CS雇用授業	81	3.37	54
	CS雇用授業(専門科目のみ)※1	49	3.33	66
	全体※2	1,544	3.32	55

※1 CS雇用授業からキャリア形成、キャリア形成 I、コミュニケーション基礎を除いた場合

※2 授業アンケート実施科目のうち、回答者数が0以外の授業科目

5-2 CS の事前研修プログラム

クラス・サポーター（CS）の役割は、学内申し合わせにより、「AL 型授業の円滑な運営のためにグループ学習やピアラーニングのファシリテートや助言、ICT 機器操作の補助および資料の整理などの業務補助を行う」と定義づけている。求められる知識・スキル・態度としては「AL への理解」・「ファシリテーターとしての心構え」等であり、合宿形式の事前研修でそれらの基礎を身に付けた後、科目での活動で実践的に学んでいる。

本年度は、事前研修プログラムの見直しの一つとして、後期開始時に「後期 CS 研修」を開催、CS 活動を振り返り、CS 活動での経験や考えを共有した。

●後期 CS 研修

参加者：本年度（前・後期）CS として活動を行う学生34名と、教職員6名

日 時：2018年10月3日

テーマ：学びの促進者となるために

目 的：①日ごろ感じていることや不安に思っていることを共有し、協働した学びを体験する。

②ファシリテーターとしての役割を確認し、今後の活動に活かすためのヒントを得る。

③ CS 活動を通じた自らの学びを振り返り、自己の成長を確認する機会とする。

講 師：宮本 知加子 特任教員（FD 推進機構）

内 容：(1) レクチャー

・ AL の定義・AL 全学展開による「実践型人材」の育成について

・ CS が AL をより効果的・効率的にするために期待されていること、ファシリテーションとは何か

(2) グループディスカッション

テーマ A：(先生・学生との関係で) 困ったこと、思いと食い違ったこと、準備が必要だったことなど

テーマ B：自分の能力が伸びたと感じる事、できるようになったこと

テーマ C：今までの CS がいる授業において、CS が効果的だと感じる場面

(3) グループ発表

グループ発表後の総括では、担当講師から授業の主役は「受講生」であり、受講生の学びを促進するための役割を取ること、授業のねらいは先生によってさまざまであり、CS としてどのような動きが必要か、先生と話し合いながら進めること、「困り感」を持っている受講生もあり、受講生と先生の「繋ぎ役」になって欲しいことが伝えられた。



5-3 CS の追跡調査

本年度はこれまで育成してきた CS 学生について、その活動が CS 自身の学習深化や成長につながっていることを検証するため、追跡調査を実施した。

(1) PROG テスト結果から見る成長

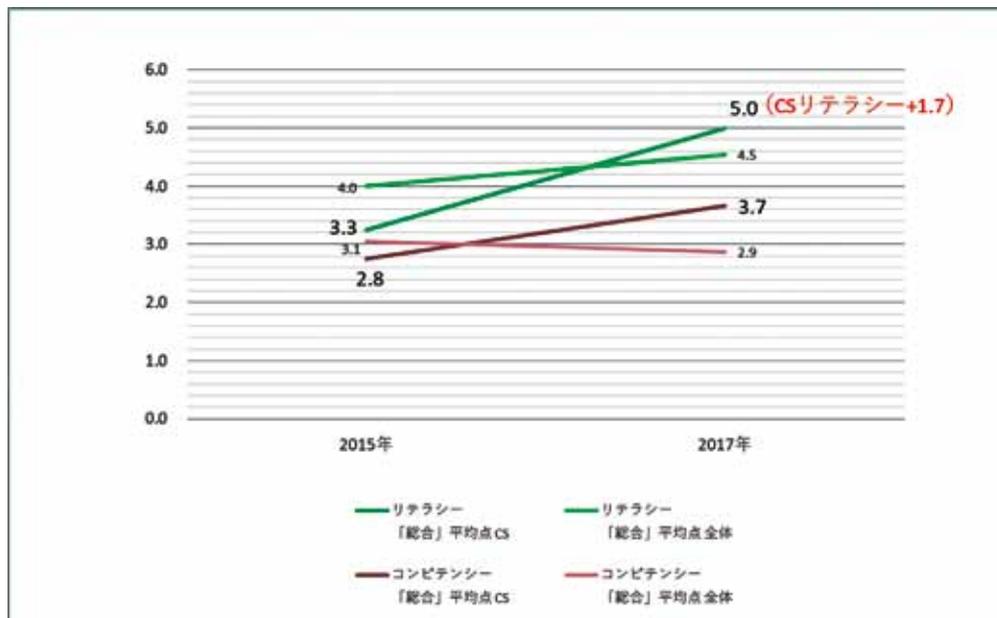
平成27年と29年に本取組で実施した PROG テストの結果では、リテラシー平均点とコンピテンシー平均点ともに CS 経験学生は比較的大きな伸びが見られた他、コンピテンシーにおいては特に親和力や協働力の伸びが顕著であったことから、CS 経験とこれらの伸びに相関関係が期待されることがわかった。

【PROG テスト結果・CS 経験学生と全体の比較】

	C S	受験者数	総合	4つの力				処理能力	
				情報収集力	情報分析力	課題発見力	構想力	言語処理能力	非言語処理能力
2015年 (H27)	C S	4	3.3	2.8	3.5	2.3	3.3	2.3	3.5
	全体	188	4.0	3.4	3.6	3.5	3.2	3.4	3.3
	差分(CS値-全体値)	-	-0.8	-0.7	-0.1	-1.2	0.1	-1.1	0.2
2017年 (H29日)	C S	3	5.0	3.0	3.7	3.0	4.7	3.3	3.7
	差分(H29-H27)		1.8	0.3	0.2	0.8	1.4	1.1	0.2
	全体	169	4.5	3.5	3.6	3.5	3.7	3.4	3.6
	差分(H29-H27)		-0.5	0.5	-0.1	0.5	-1.0	0.1	-0.1
	差分(CS値-全体値)	-	0.5	-0.5	0.1	-0.5	1.0	-0.1	0.1

	C S	受験者数	総合	3つの力			9つの要素								
				対人基礎力	対自己基礎力	対課題基礎力	対人基礎力			対自己基礎力			対課題基礎力		
							親和力	協働力	統率力	感情制御力	自信創出力	行動持続力	課題発見力	計画立案力	実践力
2015年 (H27)	C S	4	2.8	3.3	2.8	2.8	3.3	3.0	3.5	3.3	2.5	3.0	2.5	2.3	2.8
	全体	188	3.1	3.3	3.2	3.4	3.6	3.4	3.0	3.3	3.0	3.4	3.3	3.3	3.4
	差分(CS値-全体値)	-	-0.3	-0.1	-0.4	-0.6	-0.4	-0.4	0.5	0.0	-0.5	-0.4	-0.8	-1.1	-0.6
2017年 (H29)	C S	3	3.7	4.7	4.0	3.0	5.0	5.0	3.7	4.0	4.0	4.0	4.3	2.7	3.0
	差分(H29-H27)		0.9	1.4	1.3	0.3	1.8	2.0	0.2	0.8	1.5	1.0	1.8	0.4	0.3
	全体	169	2.9	3.1	3.2	3.4	3.2	3.4	3.0	3.1	3.2	3.4	3.3	3.3	3.6
	差分(H29-H27)		-0.2	-0.2	0.0	0.1	-0.5	0.0	0.0	-0.1	0.2	0.1	0.1	0.0	0.2
	差分(CS値-全体値)	-	0.8	1.6	0.8	-0.4	1.8	1.6	0.7	0.9	0.8	0.6	1.0	-0.6	-0.6

【PROG テスト結果・CS 経験学生の推移】



また、累積 GPA・進学率・就職率においても CS 経験学生には優位性が見られることが確認された。

【卒業生の累積 GPA・進学率・就職率】

学科	2017(H29)年3月卒業生								2018(H30)年3月卒業生							
	卒業生数		累積GPA平均		進学率※1		就職率※2		卒業生数		累積GPA平均		進学率※1		就職率※2	
	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体	CS	全体
電子情報工学科	4	82	2.33	2.10	25.0%	6.1%	100.0%	100.0%	5	69	2.75	2.25	40.0%	8.7%	100.0%	100.0%
生命環境化学科	1	76	2.58	2.32	0.0%	5.3%	100.0%	100.0%	0	89	-	2.23	-	9.0%	100.0%	100.0%
知能機械工学科	5	102	3.18	2.33	40.0%	4.9%	100.0%	100.0%	7	96	2.70	2.27	0.0%	4.2%	100.0%	100.0%
電気工学科	0	77	-	1.84	-	5.2%	100.0%	100.0%	0	72	-	1.92	-	12.5%	100.0%	100.0%
情報工学科	9	141	3.21	2.48	33.3%	2.8%	100.0%	99.2%	9	158	3.22	2.50	44.4%	5.1%	80.0%	100.0%
情報通信工学科	1	87	2.33	2.09	0.0%	8.0%	100.0%	100.0%	8	79	2.79	2.08	37.5%	5.1%	100.0%	100.0%
情報システム工学科	21	93	2.45	2.17	23.8%	5.4%	100.0%	98.8%	14	95	2.83	2.47	14.3%	8.4%	100.0%	100.0%
システムマネジメント学科	5	70	2.33	2.11	20.0%	2.9%	100.0%	100.0%	3	73	3.32	2.51	0.0%	1.4%	100.0%	100.0%
社会環境学科	4	172	3.23	2.16	0.0%	0.6%	100.0%	100.0%	3	184	2.69	2.16	0.0%	0.5%	100.0%	99.4%
総計	50	900	2.70	2.20	24.0%	4.1%	100.0%	99.8%	49	915	2.89	2.28	22.4%	5.4%	97.4%	99.9%

※1 進学率=進学者数/卒業生数 ※2 就職率=就職者数/就職希望者数

これらの検証により、CS 経験学生の学習深化と成長が一定程度確認できたといえる。

今後は、教員が求める CS の役割を再度抽出し、それらの要素を再検討した上で、CS 養成における到達目標を明示し、育成過程の見直しを行う予定である。

5-4 学生による授業改善活動（学生 FD スタッフ）

本取組では、CS の活動の活発化によって形成されてきた CS コミュニティを活用し、学生が授業を構成する一方の当事者として授業改善に参画するシステムを構築する取組を行ってきた。活動の端緒として、平成27年度から CS 合宿の運営への参画をはじめ、平成28年10月には学内で公募を行い、「学生 FD スタッフ」として発足し、活動を開始した。平成29年12月に団体の名称を「FIT - join（フィットジョイン）」と定め、本年度は本格的な活動を展開した。種々の活動を通して、学生の視点で教員が持つ教育改善に向けた意欲・努力を感じ、教職員とともに授業改善に取り組んでいくことを自らの活動の課題と位置付けることができた。

【活動実績】

時期	内容
H30/1月～4月	新入生オリエンテーションの企画運営
H30/6/18	FD Café「授業外の学修について話をしよう」開催 教職員と学生 FD スタッフが授業外学修の実際について意見交換
H30/7月・10月	Join-Talks 開催 学生 FD スタッフと参加学生の交流を図るとともに、学生の不安の解消や問題の解決などを一緒に考えていくイベント
H30/8/28～8/29	学生 FD サミット in 京都光華女子大学 参加
H30/10月～11月	教員インタビュー・授業参観実施
H30/12月	広報誌「Future Design 学生とともに、先生とともに創る」Vol2発行 学生 FD の活動や教員インタビューの内容を紹介
H30/12/22	Q-Conference 2018（九州地区大学教育改善ネットワーク年次大会）にてポスター発表、ポスター優秀賞銀賞受賞



(FD Café) 教職員との意見交換



(広報誌 Future Design)



(Q-Conference) 学生 FD の活動をポスター発表

6. 学習ポートフォリオの活用

6-1 学習ポートフォリオの機能と学生への導入指導

(1) 学習ポートフォリオの機能

ALによる学習効果を高めていくためには、学生の「やる気・動機づけ」が重要な要素となる。それらを継続的に保持、向上させていくためには、目標を設定し、その達成のため自らをモニタリング（メタ認知）しながら調整をしていくという能動的なプロセス（自己調整学習）へと学生が進むよう支援する必要がある。これまで本学では、キャリア活動の記録に主眼を置いた「キャリア・ポートフォリオ」を運用してきたが、今回これをより汎用的なシステムへと改善し、学習ポートフォリオとして開発、教員・学生間のフィードバックにより学習成果の共有や振り返りを相互的に行いながら、授業改善や自己調整学習を支援できる形成的アセスメントツールとして活用していくこととした。名称は、「主体的学びのための双方向学修支援システム【略称】：FIT-AIM（フィットエイム）＝FIT-Active, Interactive, Managing system」とし、本年度4月から運用を開始した。

【学習ポートフォリオ (FIT-AIM) の画面】



【主な機能】

- ① 半期の振り返りと目標設定
- ② 授業の振り返り
- ③ ルーブリックによる主体性評価 (「授業理解」・「講義への取組姿勢」)

【授業理解】

4	講義内容を越えた課題を行い理解できた
3	講義の内容を理解できた
2	講義の内容をほぼ理解し、分からない点や課題をまとめられた
1	講義の内容を半分程度理解した

【取組姿勢】

4	模範となる学習行動をとった、発展問題に挑戦する、友人に教える、リーダーを務めるなど
3	学習を深めるために自分から働きかけを行った、質問や意見表明を行うなど
2	後で復習しやすいよう工夫しながら取り組んだ、板書以外の先生のコメントもメモするなど
1	学習環境を整え学習内容を理解しようと努めた、ノートを工夫する、集中して取り組むなど

④ 授業外学修時間の計画・実施

(2) 導入指導の実施

平成30年度新入生に対して、入学後の前期授業開始1週間の期間に、各科クラスごとに導入指導を実施し、本システムの活用の意義と目的、操作方法についての指導と目標の入力を行った。また、教職員向けに授業でどのように活用するかについての説明会を実施した。

●新入生導入指導の内容（約60分）

実施期間：2018年4月9日～20日

目的：①学習ポートフォリオ活用の意義と目的を理解する。

②学習ポートフォリオの基本的な操作方法を理解する。

③「将来の自分の姿」と「半期の目標」について、システムへの入力を完了する。

指導実施者：FD推進室職員・情報企画課職員

対象者と参加者：2018年度新入生1,060名うち参加者955名（90.1%）

●教員向け説明会

実施日：2018年4月3日・6日

参加者：63名（教員49名、職員14名）

説明者：FD推進室・情報企画課

株式会社 SRA



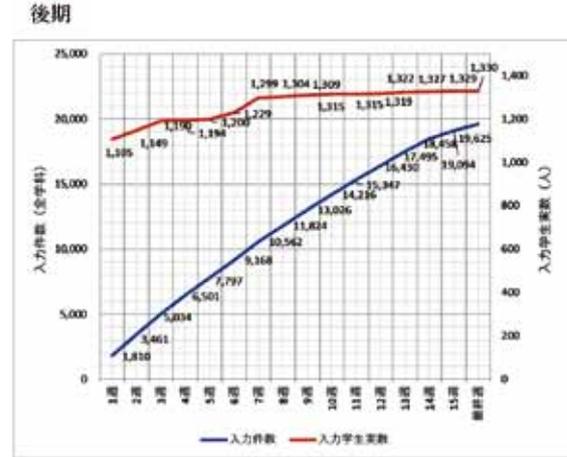
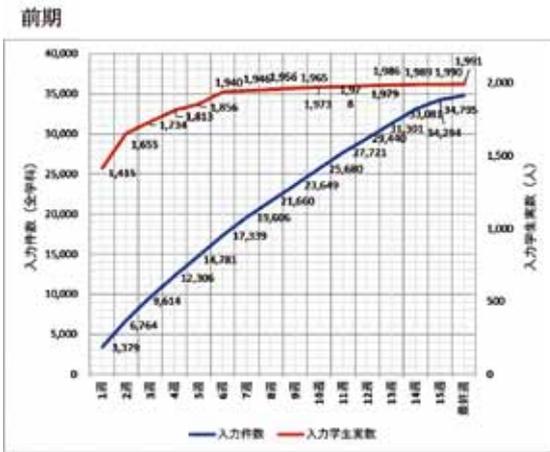
6-2 学習ポートフォリオの活用状況

(1) 入力件数

本年度4月導入後の活用状況をみると、前期における利用授業数443、総授業科目数824、利用率53.8%、後期における利用授業数256、総授業科目数774、利用率33.7%となっている。活用例は様々だが、授業での毎回の振り返りや、それをもとにした宿題（課題）の提出・返却、講義理解度や取組姿勢の確認を行いながら講義中間期におけるアンケートとして活用するなどの取組が行われている。

【FIT-AIM の振り返り入力件数・入学生実数】

授業回	1週	2週	3週	4週	5週	6週	7週	8週	9週	10週	11週	12週	13週	14週	15週	最終週	
入力件数	2018年度前期	3,379	6,764	9,614	12,306	14,781	17,339	19,606	21,660	23,649	25,680	27,721	29,440	31,301	33,081	34,294	34,795
	2018年度後期	1,810	3,461	5,034	6,501	7,797	9,168	10,562	11,824	13,026	14,216	15,347	16,430	17,495	18,458	19,094	19,625
入学生実数	2018年度前期	1,415	1,655	1,734	1,813	1,856	1,940	1,946	1,956	1,965	1,973	1,978	1,979	1,986	1,989	1,990	1,991
	2018年度後期	1,105	1,149	1,190	1,194	1,200	1,229	1,299	1,304	1,309	1,315	1,315	1,319	1,322	1,327	1,329	1,330



(2) 活用事例

- ① 「教養科目」
 - ・ 毎回の授業の振り返りを記載させる（義務付け、評価の一部）
 - ・ 指示していなかったが、学生が自主的に登録
- ② 「専門科目」
 - ・ 毎回の授業の振り返りを記載させる（義務付け、一回につきマイナス1点）
 - ・ 毎回の授業の振り返りの記載と宿題の提出（評価の一部）
 - ・ 授業の振り返りの記載を指示し、記載した学生に対しては採点した宿題答案の返却
- ③ 「卒業研究」
 - ・ 就職活動で休むという場合に、報告書（どんな会社、どんなことをした）を提出。「成果物の登録」機能を使い、教員が作成したひな形に記載したものを登録。
 - ・ 1週間の作業内容を登録。
- ④ 中間アンケートとして活用
 - ・ 講義第4週～5週目の形成的評価として FIT-AIM の機能を活用してアンケートを実施、授業改善につなげる

(3) 活用の効果（教員意見）

- ・ 科目の性質によるが、毎回授業の振り返りを記載することで理解すべき重要な点が整理される。
- ・ 講義理解度が毎回グラフでチェックできるのは良い。教員の実感とも合っている。
- ・ 授業の振り返りを見ると、客観的に自分を見ることができている、わからないところを整理で

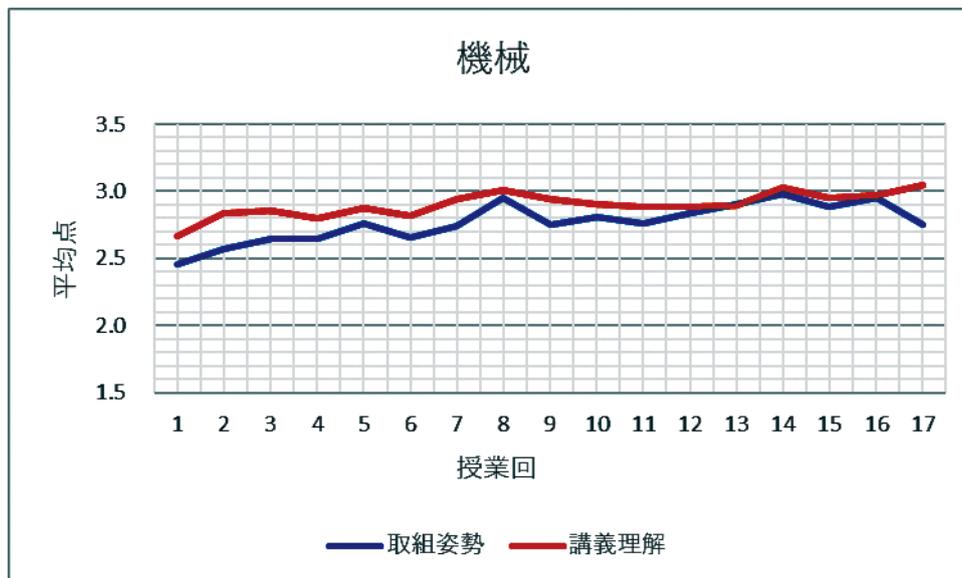
きている学生を確認できる。

- ・ 昨年の同じ科目の履修生に比べて、宿題をきちんと求めるレベルでやっている学生が多くなった。
- ・ 振り返りの記載方法について、ノートのように書く学生もいれば、躓いたところを書き、他の科目でも生かせる勉強法として定着させる学生もいる。

(4) システムの活用により確認できる成果

本システムの機能として、学生がポートフォリオ上で自己評価した「講義理解度」と「取組姿勢」を授業回に沿って確認することが可能である。それにより、講義全体を通じたプロセスの中で、取組姿勢や講義理解度の傾向が分かる。このデータは、学生の視点では、自身の学びを振り返りより良い学習行動につなげること、教員の視点では、授業改善のための資料とすることに資するものとなる。

【授業回数別の取組姿勢と講義理解の平均点（工学部知能機械工学科）】



7. 学習成果指標の策定

7-1 主体性のルーブリック

学習成果指標の開発については、本学で伸ばそうとしている「主体性」について教職員で共通認識を持ち、それをもとに学生にとっては学修指標として、教員にとっては評価指標として活用するためルーブリックを作成することとした。そのステップとして、まず学生視点で、次に教員視点で「どのような行動」が「主体的な学習」といえるかを明確にする作業を行い、両者のずれを見ることとした。最後に、その内容と本学のディプロマ・ポリシーの要素との関連を見る作業も行った。

学生については、CS 経験のある学生を中心にワークショップを行い、学生が考える主体的な学習行動を付箋に書き出し、カテゴリズ。最終的には「模範・貢献」「働きかけ・問題解決」「学び方の工夫」「学ぶ姿勢の確立」の4つのレベルに整理した。

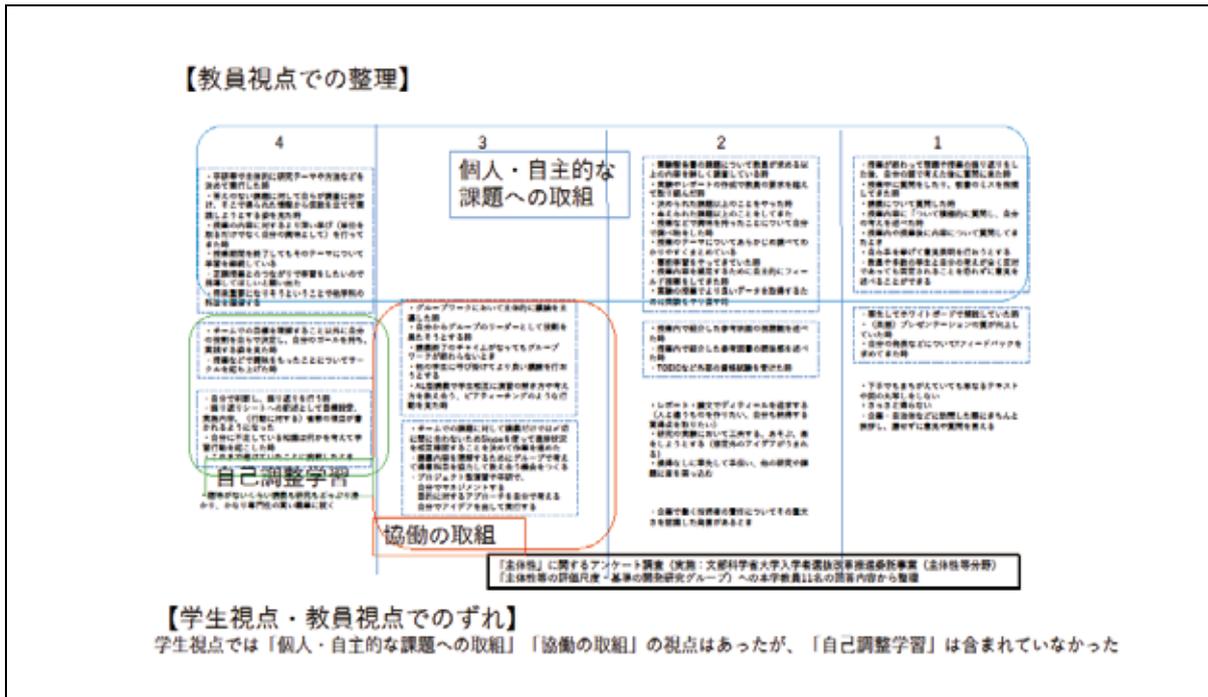
【主体性ルーブリック（学生視点）】

レベル	模範・貢献	働きかけ・問題解決	学び方の工夫	学ぶ姿勢の確立
	4	3	2	1
主体性	授業で求められた課題（達成目標）を解決し、さらに要求される以上に、当該分野に興味関心を持ちながら、学習に取り組むことができる、さらに、他の学生に教える、リーダーを務めるなど、学習コミュニティにおける貢献を果たしている。	授業で求められた課題（達成目標）を自ら解決することができる。さらに、学習コミュニティにおいて、学習を深めるための働きかけ（質問・意見表明）ができる。	授業で求められた課題（達成目標）を解決するために、授業内外において、自ら工夫して学習に取り組むことができる。	学習者として、学習環境を整え、学習内容を理解しようと努めることができる。
具体例	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予習の段階で、授業で必要になるこれまでの知識・学習内容を復習しておく ・ 授業の発展問題を解く（授業の復習） ・ その分野がどのように役に立つのか説明できる ・ 授業内容をを超えて、関心をもった部分について自分で学習する。 ・ クラスの仲間に教えることができる ・ グループ活動において、リーダー役割をとることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 分からないところをはっきりさせながら、予習を行う。 ・ 授業後、復習を行う（わからないことがなくなるまで） ・ 理解できた知識を仲間と共有する ・ 授業中、先生に質問し、分からないところを皆で解決できる ・ 分からないところをそのままにせず、質問をする（個人的に） ・ 自分の意見を発表できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業が聞きやすい（板書が見やすい）教室の前半に座る ・ 授業前に授業全体の流れをつかみ、授業の後には振り返りを行う ・ 板書以外の先生のコメントをメモする ・ 分からないところをメモし、後で学習しやすいようにしておく ・ 分からない問題をまとめて、復習しやすいように工夫する ・ 自分の発表を発表できる 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業前にスマホを片付け、教科書を開いておく ・ 授業後に、授業全体の流れを見直す ・ 分からないところを自分で調べる ・ 授業の内容に関心をもち、傾きながら授業をキック、また発表者の方を向いて聴く ・ 先生に尋ねられたことに応答する

「主体性の育成・評価のためのルーブリック作成の試み」
 福岡工業大学 FD 推進機構 宮本 知加子（福岡工業大学 FD Annual Report 2016 P96）

次に、教員視点では、外部の「主体性」に関するアンケート調査に本学教員11名が学生のどのような行動を主体的だと思うかという内容を回答したものがあつたため、その回答内容をカテゴリズし、レベルの整理を行った。その後、内容について整理を行ったところ、「個人・自主的な課題への取組」「協働の取組」「自己調整学習」といった要素が混在していることが分かった。また、学生視点でのルーブリックと比較してみたところ、「個人・自主的な課題への取組」「協働の取組」については学生のルーブリックには含まれていたが、「自己調整学習」の内容はあまり含まれていなかった。

【主体性ルーブリック（教員視点）】



3つの要素を「自主的な課題への取組」「自律的学習の習慣化」「協働課題への取組」の評価項目に分けて整理したものが「主体性」ルーブリックである。その後、評価項目を福岡工業大学ディプロマ・ポリシーの要素と対比してみたところ、それぞれG「自主的、継続的に学習する能力」、H「与えられた制約の中で計画的に仕事を進め、まとめる能力」、I「チームで仕事をするための能力」におおよそ対応しており、教員・学生ともに日頃意識している「主体的学び」はディプロマ・ポリシーと強く関連するものであることがわかった。

【福岡工業大学「主体性」ルーブリック】

■ルーブリック評価「主体性」

評価項目	4 ファイナル・ステップ	3 サード・ステップ	2 セカンド・ステップ	1 ファースト・ステップ
自主的な課題への取組 G	授業で求められた課題を解決し（仕上げ）、さらに要求される以上に、当該分野に興味関心をもちながら、学習に取り組むことができる。	授業で求められた課題を自ら解決する（仕上げる）ことができる。	授業で求められた課題を解決するために、授業内外において、自ら工夫して学習に取り組むことができる。	学習者として、学習環境を整え、学習内容を理解しようと努めることができる。
自律的学習の習慣化 H	自らの学習への取組（目標設定や計画性、実施内容等）についての振り返りの内容を、次の学習への取組の改善に活かすことができる。	自らの学習への取組（目標設定や計画性、実施内容等）について振り返り、良い点や改善点を見つめることができる。	授業で求められた達成目標を達成するために、学習の見通しを立てて、計画的に取り組むことができる。	学習者として、学習内容の範囲や内容について理解し、学習に取り組むことができる。
協働課題への取組 I	他の学生に教える、リーダーを務めるなど、学習コミュニティにおける貢献を果たしている。	学習コミュニティにおいて、学習を深めるための働きかけ（質問・意見表明）ができる。	自分の感想を発表するなど、学習コミュニティに参画する意思を示すことができる。	他者の話を傾聴し、学習内容を理解しようと努めることができる。

【福岡工業大学ディプロマ・ポリシー】

[DP]	修得する知識・能力
A	地球的観点から多面的に物事を考える能力とその素養
B	技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び社会に対して負っている責任に対する理解
C	数学及び自然科学（人文社会科学）に関する知識とそれらを活用する能力
D	当該分野において必要とされる専門知識とそれらを活用する能力
E	種々の科学技術、情報および知識を活用して社会の要求を解決するためのデザイン能力
F	論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力
G	自主的、継続的に学習する能力
H	与えられた制約の中で計画的に仕事を進め、まとめる能力
I	チームで仕事をするための能力

次にこの主体性のルーブリックをどのように評価に活用するかという検討を行っていく。現時点では、各科目における達成目標（ディプロマポリシー A～I に対応する）の達成度をどのような評価方法を活用して評価するのかを明らかにするとともに、多様な要素の中からそれぞれの授業科目の形態、目標、内容に即して可能な限り複数を選択して行うという成績評価ガイドラインの中に、G/H/I の要素に対応する達成目標について主体性ルーブリックを参照して評価を行っていくことを示すことにしており、具体的な科目での評価活用事例を蓄積していく予定である。

【福岡工業大学ディプロマ・ポリシーのカテゴリ化と評価方法の対応の例示】

ディプロマポリシー	カテゴリ	評価するための課題	成績評価の方法
A・C・D	専門力・教養力	・身に付けるべき学習内容を問う課題	・筆記試験（小テスト、レポートを含む）
B	倫理観・責任感	・身に付けるべき学習内容を問う課題	・筆記試験（小テスト、レポートを含む）
E・F	発想力・表現力	・パフォーマンス課題（プレゼンテーション、レポート、図表グラフなど）	チェックリスト、科目による指標、ルーブリックなどを用いた評価
G・H・I	主体性	<ul style="list-style-type: none"> ・ALにおける協働課題（グループディスカッション、グループワーク、PBLなど） ・学修ポートフォリオ（FIT-AIM）で自己省察を行う課題 ・授業外における主体的な学習の取り組みを促す課題 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALを通じたグループ活動等での態度をその姿勢を図るためのルーブリックで評価 ・記入の分量および内容 ・授業外学習の時間および内容

7-2 授業外学修時間

学習成果指標として本年度特に注目した要素としては、授業外学修時間がある。学生一人当たりの AL 科目に対する授業外学修時間（1 週間あたり）は、平成27年度実績の2.3時間から平成30年度実績の6.1時間と徐々に伸びてきている。

しかしながら、目標とする20時間とは乖離した状況である。これについて、いくつかのデータ検証を行い、目標値との乖離の原因を分析した。

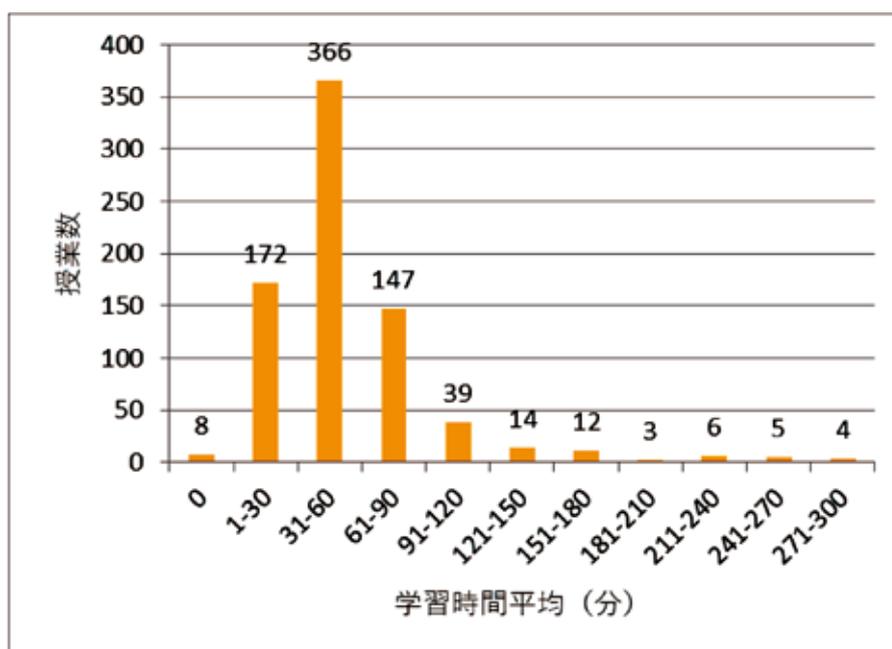
(1) シラバスの記載内容との関連

平成30年度前期の授業外学修時間の実態は、1授業当たり平均は54分、それに受講数8.73科目を掛けると約7.9時間となる。1授業における状況の分析を行ってみると、学修時間平均は31分～60分が最多。最小時間は0分、最大時間は300分。実験やプログラミング、ゼミナール科目などで学修時間が長い。

【授業アンケートの学習時間平均データ別授業の内訳】

学習時間平均 データ区間 (分)	授業数 (a)	全体割合 (a)/776	(a) の内数			
			実験・実習・ゼミ		AL 授業数	
			授業数 (b)	(b)/(a)	授業数 (c)	(c/a)
0	8	1.0%	3	37.5%	7	87.5%
1-30	172	22.2%	24	14.0%	145	84.3%
31-60	366	47.2%	19	5.2%	304	83.1%
61-90	147	18.9%	14	9.5%	124	84.4%
91-120	39	5.0%	11	28.2%	30	76.9%
121-150	14	1.8%	2	14.3%	12	85.7%
151-180	12	1.5%	8	66.7%	12	100.0%
181-210	3	0.4%	1	33.3%	3	100.0%
211-240	6	0.8%	4	66.7%	6	100.0%
241-270	5	0.6%	4	80.0%	5	100.0%
271-300	4	0.5%	4	100.0%	4	100.0%
計	776	—	94	—	652	—

【学習時間平均別の授業数】



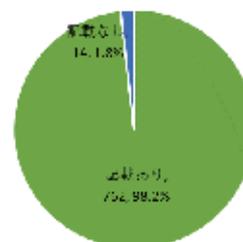
また、シラバスでの記載内容との関連では、授業外の学修内容（時間）がシラバスに記載ありの授業の方が無しの授業よりも時間が長い。そのうち具体的な学習時間の記載については時間の伸びに影響していないが、具体的な学習内容の記載がある場合には、時間の伸びに繋がっている。

授業設計や課題の指示の工夫について事例調査が必要である。

【シラバスにおける授業外の学修内容（時間）の指示と学習時間平均との関係】

「授業外の学修内容（時間）」記載

	授業数		学習時間平均（分）
	数	割合	
記載あり	762	98.2%	56
記載なし	14	1.8%	60
計	776	-	-



◆「記載あり」授業のうち、具体的な学習時間の記載

	授業数		学習時間平均（分）	備考
	数	割合		
記載あり	662	86.9%	54	具体的な学習内容の記載あり：494科目（75%）
記載なし	100	13.1%	65	具体的な学習内容の記載あり：77科目（77%）
計	762	-	-	-

◆「記載あり」授業のうち、具体的な学習内容の記載

	授業数		学習時間平均（分）	備考
	数	割合		
記載あり	571	74.9%	60	具体的な学習時間の記載あり：494科目（87%）
記載なし	191	25.1%	44	具体的な学習時間の記載あり：168科目（88%）
計	762	-	-	-

(2) 授業外学修時間の把握方法の改善

これまで、本指標の数値については期末の授業アンケートにおいて一授業に対する予復習の時間を問い、その平均値を履修科目数平均で乗じたものをとっていた（H29年度7.7時間 / 目標値18時間）。しかしながら、学生にとっては、毎日の生活においてどの科目の学習をどの程度やっているかを把握することは難しいこと、また授業外学修時間の内容について、自宅での予復習の他、学内でレポート作成のために調べものをしたり、他の学生と課題について相談したりするなどの多様な学習形態での学修時間を含むことについて認識のばらつきがあることなどから、正確な状況が把握できていない可能性がある。そこで、「1週間の生活記録」という形式で調査を実施し、本学学生の授業外学修時間の状況把握を行った。また、授業外学修の定義について、統一した内容を示し、学生の理解にばらつきがでないよう工夫した。

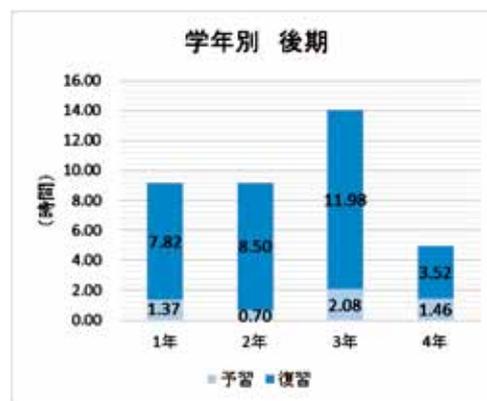
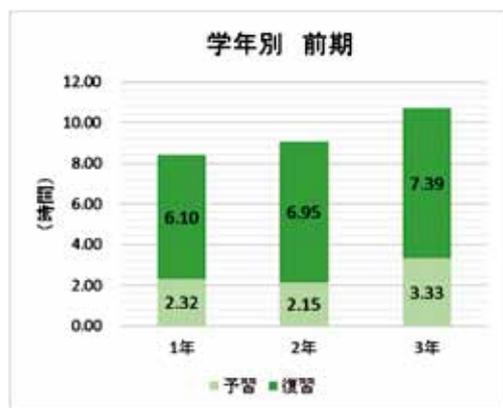
【教示内容（授業アンケートより）】

予習・復習には図書館やインターネットでの調べ物、FIT Replay の視聴を含みます。また、個人の学習だけでなく、友人や先輩とのグループワーク、学習相談コーナーを利用した学習、オフィスアワーを利用した教員への質問等、学習にかけたすべての時間が対象となります。

【調査方法】

1年次から4年次までの指定する科目において、講義実施第13週の課題として、学生に1週間の生活記録を登録させ、授業外学修時間の状況を把握する。

調査の結果、授業外学修時間の状況は、予習と復習を併せて全学年平均で前期8.88時間、後期8.29時間（通年8.59時間）とこれまでのデータ（平成29年度7.7時間、平成30年度7.2時間）と比較すると1時間程度の差が見られた。また、学年別で見ると3年次生の時間数が多く、前期10.72時間、後期14.07時間（通年12.40時間）と、全学年平均との差が大きい。さらに、個別の学生データを見ると、3年次生・4年次生の中には、20時間・30時間を超える学修時間を記録している場合もあり、授業外学修時間の個人による差がどこにあるのか（履修状況や生活状況、成績との関係）個別の状況をサンプルとして検証し、課題の明確化を図っていきたい。



(3) モデル学生である CS の学修時間の把握

CS が主体的学びのモデル学生であり、授業外学修にも積極的に取り組んでいるのではないかと仮説のもとに、調査データから、CS 経験者のみを抽出（後期調査実施回答者298名のうち CS 経験者23名）して確認したところ、平均で5.85時間となっており、顕著な差は見られなかった。これについては、CS が比較的成績優秀であることを鑑みると、課題以外の授業理解にける予復習の時間は、他の学生に比して長くない（必要ない）のではないかという想定ができ、授業設計における課題の出し方（理解度に応じて課題の難易度を検討するなど）に工夫が必要であるのではないかと課題が見出せる。

第 3 章

取組の成果

3

取組の成果

取組の成果

1. 事業目標に関する達成度

本事業における必須指標および事業目標に関する達成度は以下のとおりである。

【テーマにおける必須指標】

項番	テーマにおける必須指標	単位	26年度	27年度	28年度		29年度		30年度	31年度
			実績	実績	目標	実績	目標	実績	実績	目標
1	アクティブ・ラーニングを導入した授業科目数の割合 [% (導入科目数/総科目数)]	%	53.6	38.8	50.0	52.0	70.0	80.2	80.7	80.0
2	アクティブ・ラーニング科目のうち、必修科目数の割合 [% (必修科目数/アクティブ・ラーニング科目数)]	%	31.4	33.0	25.0	36.1	23.0	36.4	37.0	20.0
3	アクティブ・ラーニングを受講する学生の割合 [% (受講学生数(実数)/在籍者数)]	%	96.6	87.0	75.0	88.6	78.0	89.5	88.9	80.0
4	学生1人当たりアクティブ・ラーニング科目受講数 [受講科目数(受講延べ人数/在籍者数)]	科目	10.4	6.1	7.0	8.6	8.0	13.5	13.1	10.0
5	アクティブ・ラーニングを行う専任教員数 [% (実施専任教員数/総専任教員数)]	%	64.4	60.8	60.0	88.2	70.0	95.7	96.6	80.0
6	学生1人当たりのアクティブ・ラーニング科目に関する授業外学修時間 [時間数(1週間あたり(時間))]	時間	—	2.3	16.0	4.0	18.0	6.3	6.1	20.0

【事業目標】

項番	各大学等の任意の指標	単位	26年度	27年度	28年度		29年度		30年度	31年度
			実績	実績	目標	実績	目標	実績	実績	目標
1	AL型授業推進組織の設置時期	—	H26.10 設置	—	—	—	—	—	—	—
2	ファカルティディベロッパー数 [人]	人	—	—	2	3	3	2	1	4
3	ディプロマ・ポリシーの改訂	—	—	全学科 実施	—	運用 開始	—	見直し 実施	—	—
4	カリキュラム・ポリシーの改訂	—	—	全学科 実施	—	運用 開始	—	見直し 実施	—	—
5	アドミッション・ポリシーの改訂	—	—	全学科 実施	—	運用 開始	—	見直し 実施	—	—
6	AL事例調査実施対象校数	校	3	3	2	3	2	3	1	2
7	ALテーマ講演会、報告会の開催回数 (FD Café、AL実践研究会)	回	3	3	2	4	2	2	5	2
8	クラス・サポーター数 [人]	人	20	72	40	77	50	75	78	60
9	クラス・サポーター事前研修プログラムの開発時期	—	H27.3	—	—	—	—	—	—	—
10	学生FDスタッフ数 [人]	人	—	—	—	—	10	14	13	30

11	AL対応教室数	教室	6	7	9	9	—	—	—	—
12	AL型授業アーカイブシステムの導入時期	—	—	H27.7	—	—	—	—	—	—
13	AL型授業アーカイブシステム活用FD 研修回数	回	—	2	1	1	1	1	0	1
14	AL型授業アーカイブシステム利用授業数	コマ	—	153	—	212	185	239	312	210
15	AL型授業アーカイブシステムを活用して振り返り学習をした学生数 [人]	人	—	562	50	602	65	590	810	80
16	在学生・卒業生アンケートの実施回数	回	—	1	1	1	1	1	2	1
17	評価委員会開催頻度 [回]	回	2	2	2	2	2	2	2	2
18	[FD Annual Report AL特集号]掲載件数 (論文)	件	—	—	—	—	5	3	—	5
19	[FD Annual Report AL特集号]掲載件数 (実践報告)	件	—	—	—	—	10	5	—	10
20	「能動的な学習態度」の評価方法の確立	—	—	—	—	—	試行開始	検討開始	評価開始	評価定着
21	学習ポートフォリオの開発	—	—	—	—	—	—	開発実施	運用開始	運用定着

定量的な数値目標の達成状況は、テーマにおける必須指標に関しては、項番1から5までの目標値を達成した。特に、本事業で目標としてきた項番1・3・5の3つの80%が達成できたことは、事業が順調に進捗していることの証左といえる。この中でも、項目1の前年からの伸びは顕著であり、この背景としては、AL導入科目の割合を明らかにするために実施している教員アンケートの回答率が9割を超えたことが大きい（平成30年度90.1%、平成29年度91.8%、平成28年度78.6%）。回答率が向上したということは、ALの展開を否定的に捉える教員層の減少として捉えることができるとともに、これまで未回答や未実施であった教員が、これまで実施した種々の施策を通じて、本学におけるALの定義や手法を共有した結果、AL実施と回答するよう変化したものであり、全学展開の具体的進展を実質的に示している。

必須指標の項番6の学生一人当たりのALに対する授業外学修時間については、実績値が目標値に届いていないものの、平成27年度から平成30年度にかけて項番1のAL型授業科目数の割合に比例して毎年度伸びを示している。本年度の成績評価ガイドラインの検討にあたって、授業外学修内容とそれに必要な時間の指示についてより詳細に学生に明示するようシラバスの様式を変更することとなった他、成績評価方法の一つとして授業外学修を例示することも新たに内容として加えている。さらに、本年度から導入した学習ポートフォリオにおいて授業外学修の計画と実施を確認できる機能や学生の生活時間管理（1週間の生活時間を授業外の学修を含めて記録し、自己管理を行う）を行う機能を活用して試行的に学習時間の状況をできる限り現実に近い形で把握するよう努めることとした。これらにより、必要な授業外学修が行われているか学生自らが振り返り、自己調整学習を行っていくことができるよう支援する取組を推進していく（分析の状況については、学習成果指標の策定 P.35～36参照）

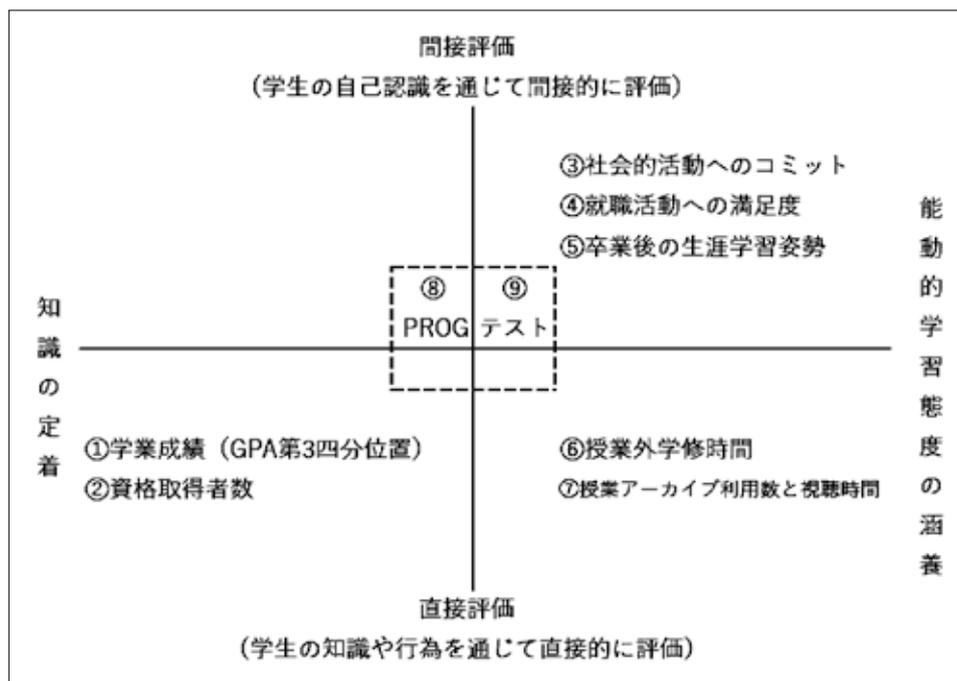
本学任意の項目については、設定した大多数指標について、目標値を達成もしくは上回る状況で推移している。その中で、平成30年度の主な取組として、FDerの認定基準の明確化やCS育成プログラムの見直し、卒業生調査の実施など、これまでの取組を俯瞰的に見たうえで、成果を確認しながら、改善点を見出していくという点検・評価のサイクルを回す道筋をつけた。

2. 成果の測定項目とその分析結果

2-1 ALの伸展に伴う成果の測定項目

本取組では、ALの進展に伴う成果の測定項目を、学生の「知識の定着」と「能動的な学習態度の涵養」のそれぞれについて以下の図のとおり設定し、その測定データによるエビデンスを踏まえて取組の改善を行っている。

【成果の測定項目】



各測定項目についての内容と、それに基づく改善事項は以下の通りである。

項番	項目	単位	調査実施時期	H26実績	H27実績	H28実績	H29実績	H30実績
【知識の定着の程度】								
1	学業成績 (GPA 第3四分位置)	—	H26~	1.58	1.59	1.63	1.64	1.66
2	資格取得者数	人	H26~	280	257	279	237	304
【能動的な学習態度の涵養】								
3	授業外学修時間 (全学平均)	時間/週	H27~	—	6.2	7.5	7.7	7.2
4	自己成長感と学習への内発的動機づけ (ジェネリックスキル)	—	H27:1年次 H29:3年次	—	テスト実施	—	テスト実施	—
5	授業アーカイブ利用数と視聴時間	時間/科目	H27~	—	5.3時間 153コマ	3.1時間 212コマ	3.5時間 239コマ	4.3時間 312コマ
6	社会活動へのコミット (ボランティア活動や地域活動への参加率)	%	H27~	—	—	28	—	—
7	就職活動の状況 (就職先が自分の目標にマッチしているとした満足度)	%	H27~	—	91.2	92.9	96.1	—
8	卒業後の生涯学習姿勢	—	H30	—	—	—	—	調査実施
【総合評価】								
9	自己成長感と学習への内発的動機づけ (ジェネリックスキル)	—	H27:1年次 H29:3年次	—	テスト実施	—	テスト実施	—

「知識の定着の程度」を示すものでは、学業成績（GPA 第3四分位値）を追跡して確認したところ、全学平均で毎年度上昇、学業成績の底上げに一定の成果が見られている。「能動的な学習態度の涵養」を示すものは、授業外学修時間の伸び、授業アーカイブシステム利用授業数と視聴時間の伸びなどにより成果が確認される他、卒業生アンケートでは就職活動への満足度の上昇が確認されており、さらに同調査では学生生活を通じて最も積極的に取り組んだことに正課（授業、卒研・ゼミ）を挙げる比率が上昇し、正課に最も積極的に取り組んだ学生ほど自ら準備活動を行い、就職先企業が目標に適ったものである傾向が認められ、ALの成果といえる結果が出ている。

2-2 AL 実施状況の経年変化

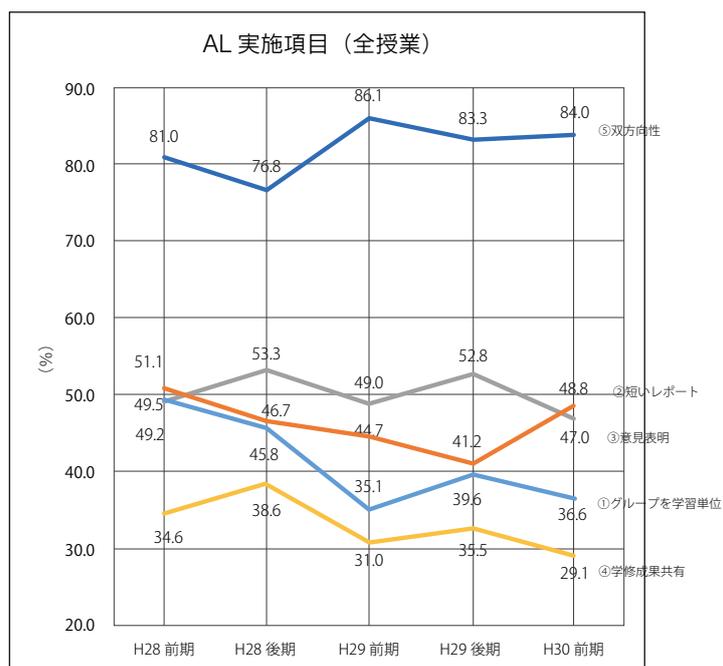
AL 実施項目の経年変化を見ると、双方向性が最も高く、その他の項目にも大きな変動は見られない。ただし、「グループを学習単位とする」「学修成果の共有を促す」については減少傾向にあるともいえる。これは、専任教員の回答率が向上していることから、事業開始初期には、最も積極的にALを展開する教員の状況が反映され、進展期には、ある程度平準化されてきたという可能性もあるものの、グループワークだけではない複数の手法が使われていることが分かる。多様な方法が認識され、展開されてきていることの証左であり、普及のフェーズを示しているのではないかと思われる。これらから言えることは、高次ALのみで教育が成り立つわけではなく、多様な手法を取り入れ、プロセスを工夫するなど土台が広がることで高次の手法に繋がっていく。手法によってレベルに高低があるわけではなく、それらの取組も教育効果があると捉えられる。

【AL 科目で実施している AL 要素】

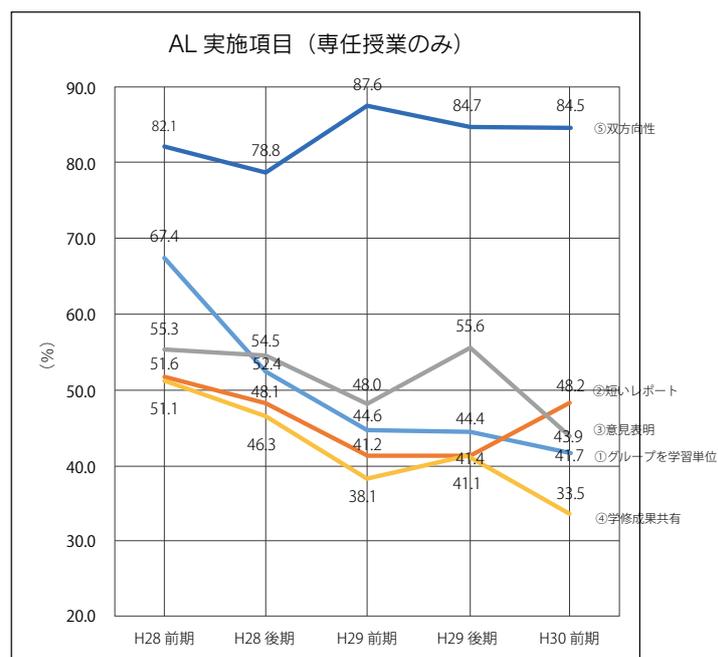
AL型授業科目のうち、実施しているAL項目 (単位：%)

	H28 (2016)				H29 (2017)				H30 (2018)	
	前期		後期		前期		後期		前期	
	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ	全	専任のみ
①2人以上のグループを学習単位としている	49.5	67.4	45.8	52.4	35.1	44.6	39.6	44.4	36.6	41.7
②ミニツッパーパー等による短いレポートを求めている	51.1	51.6	46.7	48.1	44.7	41.2	41.2	41.1	48.8	48.2
③議論や発表等学生の意見表明がある	49.2	55.3	53.3	54.5	49.0	48.0	52.8	55.6	47.0	43.9
④グループ単位で学習成果の共有を促している	34.6	51.1	38.6	46.3	31.0	38.1	32.5	41.4	29.1	33.5
⑤その他、教員と学生との双方向性が確保されている	81.0	82.1	76.8	78.8	86.1	87.6	83.3	84.7	84.0	84.5

【AL 実施項目の経年比較（全授業）】



【AL 実施項目の経年変化（専任授業のみ）】



3. 点検・成果公表

3-1 学生調査からみる事業の成果

(1) 授業アンケート

本学では、授業アンケートの設問項目に、ディプロマ・ポリシーに示す要素について、「自分が

伸ばしたいと思う力」「実際に伸ばすと実感する力」を問い、学習成果の振り返りを行っているが、そのデータについて、事業開始直後の2015年度前期の数字を100%としてその後の変動状況を見たところ、ディプロマ・ポリシーのうち、ALの進展により特に伸長を目指す要素であるG/H/Iの学生の自己評価が高まっていることが分かる。これは、AL型授業が増加したことにより、協働型の課題や、自主的な学びへの取組の機会が増えた結果であると推定される。今後は、これらについて各授業が育成しようとしている力と学生との実感にずれがあるかどうかの検証を行うことにより、教育方法と学修成果とのつながりを見ることが出来る。

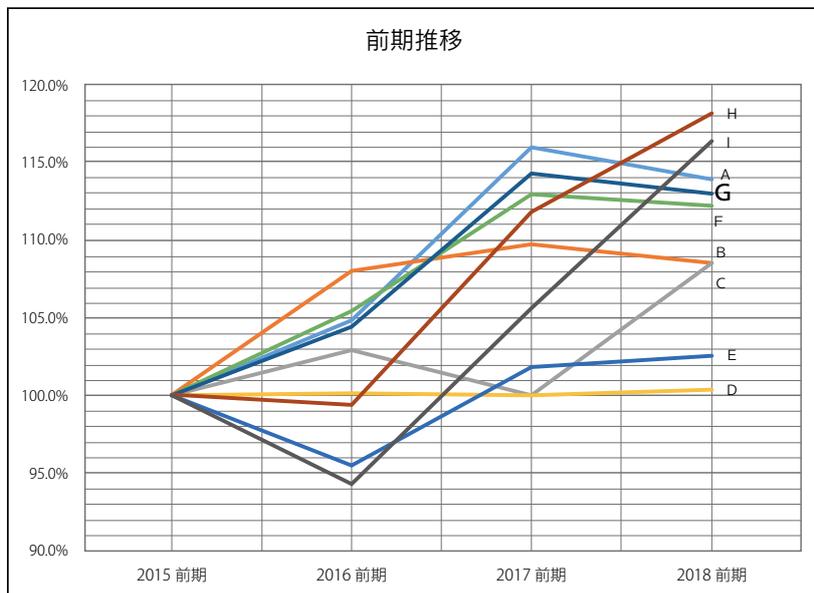
【授業アンケートの項目集計】

- 4. この授業で成長させたいと考えていた『力』は何ですか。当てはまるものを3つまで選んでください。
- 5. この授業を通じて実際に伸ばすことができた実感している『力』は何ですか。当てはまるものを3つまで選んでください。

No	選択項目	問4	問5
A	地球的観点から多面的に物事を考える能力とその素養	1,598	1,394
B	技術が社会や自然に及ぼす影響や効果、及び社会に対して負っている責任に	2,062	1,835
C	数学及び自然科学（人文社会科学）に関する知識とそれらに応用する能力	3,087	2,874
D	当該分野において必要とされる専門知識とそれらに応用する能力	6,758	6,404
E	種々の科学技術、情報及び知識を活用して社会の要求を解決するためのデザ	1,585	1,514
F	論理的な記述力、口頭発表力、討議等のコミュニケーション能力	2,087	1,986
G	自主的、継続的に学習する能力	3,602	3,480
H	与えられた制約の中で計画的に仕事を進め、まとめる能力	1,622	1,660
I	チームで仕事をするための能力	1,373	1,418

(2017年後期)

【実際に伸ばすことができた実感している力の経年変化（2015前期を起点）】

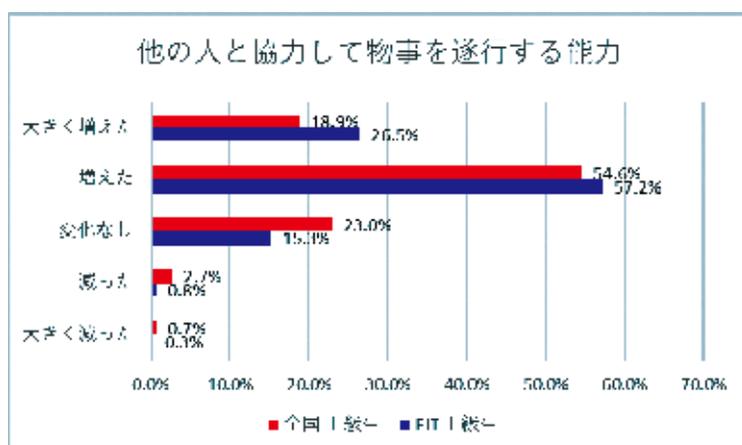
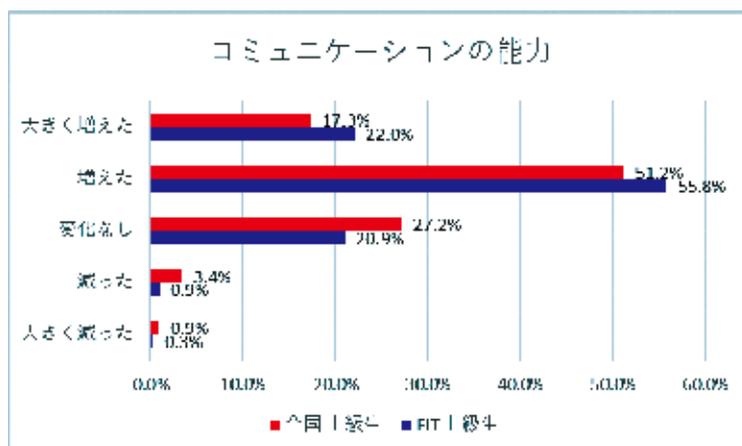
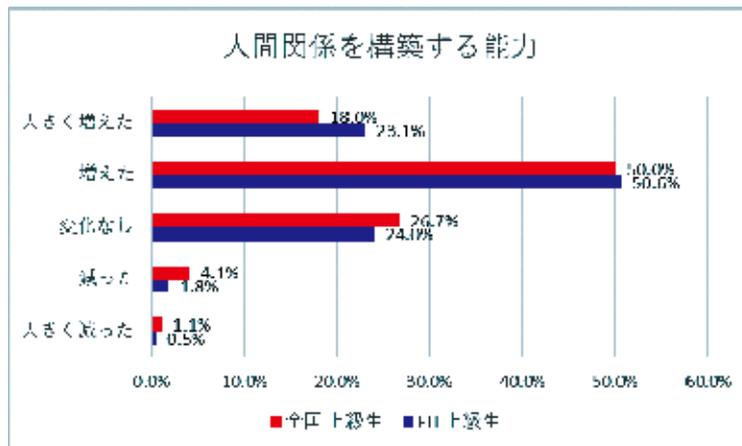


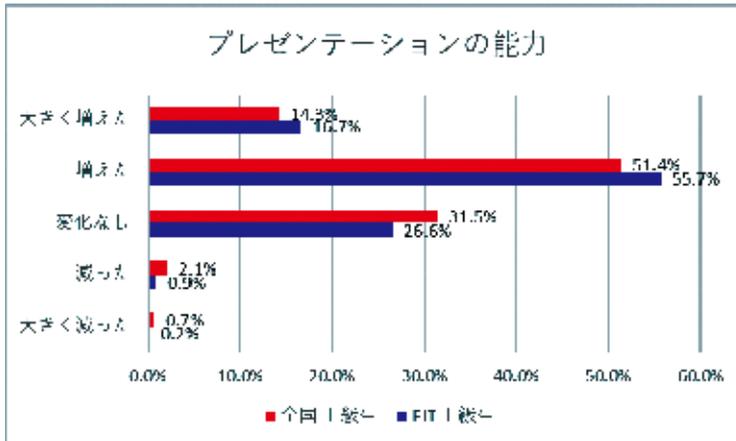
(2) 工大サミット学生調査

学習成果の測定を目的とした学生調査については、2018（平成30）年度から「大学 IR コンソーシアム」に加盟し、教学 IR データを全国共通の調査票で収集・分析することにより、学生調査項目の共有、調査結果の相互比較に加え、認証評価や格付け評価等の内部質保証のエビデンスとして活用することとし、1回目の調査を平成30年10月に実施した。それに先立ち、平成30年4月に、私立5工大（愛知工業大学、大阪工業大学、芝浦工業大学、広島工業大学、本学）で創設している「工

大サミット」の枠組みの中で、同調査を試行的に共同して実施、調査結果から得られた各大学の教育内容の特徴を評価し合い、教育の質を客観的に保証するとともに、教育改善の方策を見出していくこととした。その調査結果から、学習成果に係る学生の自己評価について、ALの進展に伴い、伸長を期待する学修成果の向上が見られており、本事業の成果を示すデータの一つとして位置付けている。

【工大サミット学生調査集計結果（全国上級生との比較）】





3-2 卒業生調査の実施

事業の点検・評価を目的とした卒業生に対する調査を以下のように実施した。

(1) 調査の目的

本学の教育が実践型人材育成に寄与しているかを点検・評価する。特に本事業（AL）での学びとキャリアとの接続を能動的な学習態度の継続という視点で検証する。

(2) 調査の方法

ア) 卒業生に対するアンケート調査

①2018.3卒（学部卒1年目）、②2013.3卒（学部卒5年後）

①は本事業開始後の初めての卒業生、②は比較対照群（キャリア教育未実施の学年）

イ)（卒業生が就職している）企業担当者に対するヒアリング調査：10社程度

(3) 調査の概要

ア) 卒業生調査

・実施時期：2018.12～2019.2月

・設問項目：大学 IR コンソーシアム卒業生調査（試行）を基本とし、本学独自の設問を追加する（設問詳細は「参考資料」卒業生調査設問項目を参照）

・実施方法：Web アンケート、QR コードを付した調査依頼票郵送

イ) 企業調査

・実施時期：2019.4月以降とし、卒業生調査の分析結果を受けて実施

・設問項目：卒業生調査の独自設問を基本とし企業側の評価を聞く（6～7問）、聞き取り30～40分で終結する内容

・実施方法：訪問ヒアリング

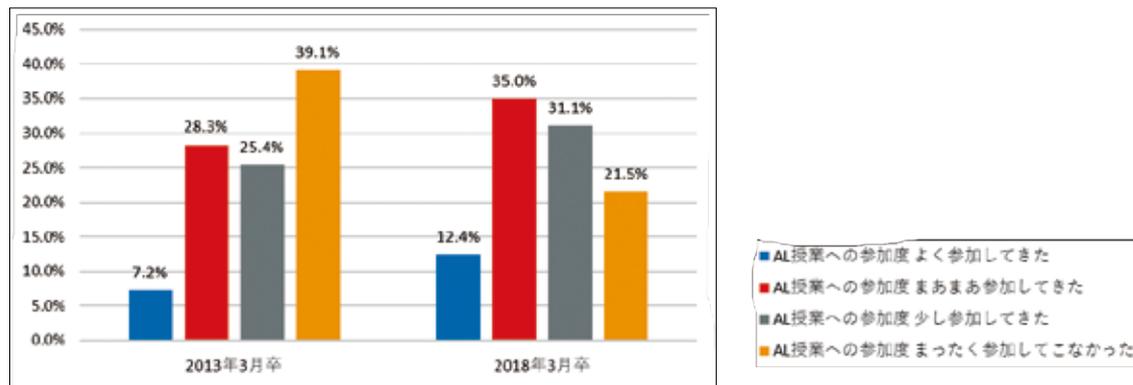
(4) 調査結果

ア) 回答状況

卒業年	発送数	回答数	回答率
2018.3	951	177	18.6%
2013.3	911	138	15.1%
合計	1,862	315	16.9%

イ) 結果の概要

(1) AL 参加度の差



グラフ AL 参加度の差

本事業開始後に初めて卒業した2018年3月卒業生とそれ以前の2013年3月卒業生に、大学生活におけるALの参加度を尋ねたところ、2018年3月卒業生の参加度が上回っており、本事業におけるALの展開を裏付ける結果となった。

また、卒業年次別に「在学中に身についた能力」を尋ねたところ、2018年3月卒者で「身についた」と答えた割合が高かったものは、「分析力や課題解決能力」・「コミュニケーション能力」・「プレゼンテーション能力」・「リーダーシップの能力」・「人間関係を構築する能力」などであること、さらにそれらをAL参加度との関係で見ると、ALに「よく参加した」と回答している学生ほど、「身についた」と回答している能力も同様の項目であった。これらの能力は、ALにより修得することを期待する学修成果と合致しており、本事業の成果が確認できるものであるといえる。また、その他の能力項目について、「時間を効率的に活用する能力」の自己評価は、ALに「よく参加した」と回答している学生ほど「身についた」と回答している割合が高かったことが確認されており、これは本学がALによって育成しようとしている「主体性」の要素としている「自己調整学習」との関わりを示す結果であるといえる。

今後は、この卒業生調査の詳細分析を進め、その結果を踏まえて、卒業生が在籍する企業にヒアリング調査を実施し、卒業生が自己評価する「身についた能力」が実際に就業場面でどのように評価されているのか、企業が求める能力との合致はどうかについて検証を進めていく。

【設問項目について】

- ・ 在学中に身についた能力は右表のA～Tの項目について「やや身についた」「身についた」「身につけていない」「あまり身につけていない」の4段階で回答
- ・ ALの参加度は、「在学中にある問題を考えたり、発表したり、ディスカッションをしたりする参加型の授業にどの程度参加しましたか」という設問に対し、「よく参加してきた」「まあまあ参加してきた」「少し参加してきた」「全く参加しなかった」の4段階で回答

【出典】 京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会「大学生のキャリア意識調査2016」の設問を一部改変

A	一般的な教養
B	分析力や問題解決能力
C	専門分野や学科の知識
D	批判的に考える能力
E	異文化の人々に関する知識
F	リーダーシップの能力
G	人間関係を構築する能力
H	他の人と協力して物事を遂行する能力
I	異文化の人々と協力する能力
J	地域社会が直面する問題を理解する能力
K	国民が直面する問題を理解する能力
L	文章表現の能力
M	外国語の運用能力
N	コミュニケーションの能力
O	プレゼンテーションの能力
P	数理的な能力
Q	コンピュータの操作能力
R	時間を効果的に利用する能力
S	グローバルな問題の理解
T	就職に向けた情報収集能力

表 身についた能力と AL 参加度の関連

		卒業年							
		2013年3月卒				2018年3月卒			
		AL参加度				AL参加度			
		よく参加してきた	まあまあ参加してきた	少し参加してきた	まったく参加してこなかった	よく参加してきた	まあまあ参加してきた	少し参加してきた	まったく参加してこなかった
A	身についていない+あまり身についていない	0.0%	10.3%	14.3%	22.2%	0.0%	8.1%	10.9%	31.6%
	やや身についた+身についた	100.0%	89.7%	85.7%	77.8%	100.0%	91.9%	89.1%	68.4%
B	身についていない+あまり身についていない	0.0%	7.7%	28.6%	27.8%	0.0%	9.7%	5.5%	18.4%
	やや身についた+身についた	100.0%	92.3%	71.4%	72.2%	100.0%	90.3%	94.6%	81.6%
C	身についていない+あまり身についていない	30.0%	33.3%	62.9%	33.4%	13.6%	8.1%	18.2%	39.5%
	やや身についた+身についた	70.0%	66.6%	37.2%	66.7%	86.4%	91.9%	81.8%	60.5%
D	身についていない+あまり身についていない	30.0%	28.2%	42.9%	29.7%	9.1%	14.5%	18.2%	26.3%
	やや身についた+身についた	70.0%	71.8%	57.2%	70.4%	90.9%	85.5%	81.8%	73.7%
E	身についていない+あまり身についていない	20.0%	51.3%	62.9%	68.5%	18.1%	45.2%	56.4%	60.5%
	やや身についた+身についた	80.0%	48.7%	37.1%	31.5%	81.8%	54.8%	43.6%	39.5%
F	身についていない+あまり身についていない	10.0%	35.9%	51.5%	59.3%	9.1%	29.0%	36.3%	57.9%
	やや身についた+身についた	90.0%	64.1%	48.6%	40.8%	90.9%	71.0%	63.6%	42.1%
G	身についていない+あまり身についていない	0.0%	17.9%	22.9%	29.6%	0.0%	12.9%	7.3%	29.0%
	やや身についた+身についた	100.0%	82.0%	77.1%	70.3%	100.0%	87.0%	92.8%	71.1%
H	身についていない+あまり身についていない	0.0%	12.8%	22.9%	24.1%	4.5%	4.8%	9.1%	29.0%
	やや身についた+身についた	100.0%	87.1%	77.2%	75.9%	95.5%	95.1%	90.9%	71.0%
I	身についていない+あまり身についていない	40.0%	51.3%	54.2%	50.0%	27.2%	40.4%	38.2%	44.7%
	やや身についた+身についた	60.0%	48.8%	45.7%	50.0%	72.7%	59.6%	61.8%	55.3%
J	身についていない+あまり身についていない	40.0%	51.3%	54.3%	59.2%	18.2%	46.8%	45.4%	60.5%
	やや身についた+身についた	60.0%	48.8%	45.8%	40.7%	81.8%	53.2%	54.5%	39.5%
K	身についていない+あまり身についていない	30.0%	48.7%	51.4%	63.0%	18.1%	46.8%	54.6%	60.5%
	やや身についた+身についた	70.0%	51.3%	48.6%	37.0%	81.8%	53.2%	45.5%	39.5%
L	身についていない+あまり身についていない	10.0%	25.6%	34.3%	50.0%	0.0%	30.6%	18.2%	42.1%
	やや身についた+身についた	90.0%	74.3%	65.7%	50.0%	100.0%	69.3%	81.8%	57.9%
M	身についていない+あまり身についていない	50.0%	76.9%	82.9%	81.5%	36.3%	64.5%	65.4%	71.0%
	やや身についた+身についた	50.0%	23.1%	17.1%	18.6%	63.6%	35.5%	34.5%	29.0%
N	身についていない+あまり身についていない	0.0%	10.3%	28.6%	35.2%	4.5%	6.4%	5.5%	29.0%
	やや身についた+身についた	100.0%	89.7%	71.4%	64.8%	95.4%	93.5%	94.5%	71.0%
O	身についていない+あまり身についていない	0.0%	12.9%	34.3%	33.3%	0.0%	14.5%	12.7%	21.1%
	やや身についた+身についた	100.0%	87.1%	65.7%	66.7%	100.0%	85.4%	87.2%	79.0%
P	身についていない+あまり身についていない	20.0%	20.5%	22.9%	35.2%	4.5%	16.1%	18.1%	18.4%
	やや身についた+身についた	80.0%	79.5%	77.2%	64.8%	95.5%	83.9%	81.9%	81.6%
Q	身についていない+あまり身についていない	0.0%	12.9%	14.3%	14.8%	4.5%	9.7%	9.1%	18.5%
	やや身についた+身についた	100.0%	87.2%	85.8%	85.2%	95.4%	90.3%	90.9%	81.6%
R	身についていない+あまり身についていない	10.0%	12.9%	28.6%	20.4%	13.6%	14.5%	14.5%	26.3%
	やや身についた+身についた	90.0%	87.2%	71.5%	79.6%	86.3%	85.5%	85.5%	73.7%
S	身についていない+あまり身についていない	50.0%	64.1%	62.8%	66.6%	22.7%	51.6%	56.3%	76.3%
	やや身についた+身についた	50.0%	35.9%	37.2%	33.4%	77.2%	48.4%	43.7%	23.7%
T	身についていない+あまり身についていない	20.0%	15.4%	17.1%	24.1%	4.5%	14.5%	7.3%	26.3%
	やや身についた+身についた	80.0%	84.7%	82.8%	75.9%	95.5%	85.5%	92.8%	73.7%

3-3 評価委員会の実施

本取組では、毎年度2回の評価委員会を開催し、取組状況の報告を行っている。事業の進捗状況や取組の成果を外部の視点から評価頂くため、産業界（株式会社九電工理事）、高等学校（福岡県立嘉穂総合高等学校長）、専門家（学校法人河合塾教育研究部長）を外部委員として迎え、本学からは学長（FD推進機構長）、事業推進責任者の学務部長（WG長）、WGのメンバーが出席するものである。

【開催実績】

- 平成30年9月27日
- 平成31年3月27日

評価委員会では、事業概要および評価指標、AL先進事例調査から得られる情報、CS導入の結果、授業アーカイブシステムの導入結果等の個々の取組について、指摘・助言を得ており、それに基づいて事業計画の見直し改善を図っている。

3-4 外部への公表



2018年10月26日、AP採択校同士での情報共有、事業改善を目的に、芝浦工業大学・大阪工業大学・本学の合同開催によるAPシンポジウムを実施した。「高大接続改革推進事業による理工学教育の質的転換」をテーマに、3大学がそれぞれ事例紹介と意見交換を行った。

この中で、本学の事例については、ALの全学展開に関して授業全科目の80%を超えるAL展開率となっていることについて、どのような施策を行ったか、導入した学習ポ

トフォリオの成果をどうとらえるかなどの質問があった。

また、2018年12月22日、九州大学にて開催された九州地区大学教育改善FD・SDネットワーク年次大会「Q-Conference2018」にはポスター発表で参加し、事業成果を発表するとともに多くの他大学教職員との意見交換を行った。

第 4 章

資 料

福工大に合ったFIT-joinの活動の模索と今後について

FIT-join とは？



FIT-joinは、本学の授業改善を学生の立場から **教員・職員・学生の三位一体** で改善・向上させようとする取り組みを行う、福岡工業大学独自のグループです。

学生FDスタッフは本学の授業改善を学生の視点から教職員と一緒に考え、教職員と学生を **“つなぐ”** 活動によって福岡工業大学での「学びのコミュニティづくり」の役割を担っています。私たちは、**学生の本音** を吸収し、**学生が感じていること** を教職員に伝え、また教職員が考えていることや課題を **学生の視点から** 考え、それを **学生に伝える存在** として活動していきたいと考えています。

FutureDesign の発行

先生方を
ものより身近に
感じてほしい!

先生方は
どんな思いを持って
授業しているのだろう?

先生は
自由に
教えてくれる
んですか?

授業参観
教員インタビュー前に授業見学し、実際の授業の雰囲気
や工夫を知る

教員インタビュー
授業参観で気付いた点
授業や研究に対する想い など

**広報誌作成
「Future Design」**

- 先生方にもっと興味を持ってほしい
- 先生方の想いを他の学生にも知ってほしい

Join-Talks の開催

Join-Talks とは？

交流・機会の提供を実施する場として企画

「様々な学科・学年の学生同士が交流できる場を作りたい」
「学生の生の声を聞くことでFIT-joinの活動のヒントを得たい」



今までの Join-Talks のテーマ

- 夏：『前期の振り返り』**
～学生生活での悩み～
- 秋：『大学生活とアルバイト』**
～生活の見直し～
- 冬：『テストに向けて、勉強の仕方』**



新入生オリエンテーション

FIT-Quest

アイスブレイク

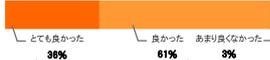
コミュニケーションゲームを企画・運営
「新入生同士の緊張感をほくして貰う」

学内オリエンテーション

学内スタンパブリーを企画・運営
「学内でよく利用する施設の場所を知ってもらう」
「新しい友達を作って貰う」

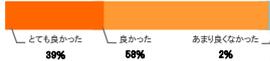


●アイスブレイク



97%

●学内オリエンテーリング



97%

●新入生からの声

- 話したことが無かった人と打ち解けられた
- 学内の様々な場所に行けてよかった

などなど

FIT-join の今後

私たちは、授業改善に向けて様々なことに挑戦していく「Venture(ベンチャー)」でありたいと思っています。そのために**学生からの意見を吸収・発信**していくこと、教職員の方々との**協働**がとても大切で、特に「学生」と「教員」をつなぐ役割として活動を行ってまいります。

また、教員の授業改善への意欲と努力が感じられる一方で、私たち「FIT-join がどのように関わっていくか」がこれからの課題であると感じています。



現在

- 先生方との距離が近くなってきた
- 先生方の授業に対する思いを感じた
- 学生向けのイベントを開始

将来

- 先生方の思いを学生に伝えたい
- 授業改善に関わっていきたい
- 更に多くの学生にイベントへ来て欲しい

2. 教育技術開発 WG 活動録 (平成30年度分)

開催日	事項	議事
平成30年 4月24日 (火)	第1回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. WG 構成員の変更について 2. H30教育技術開発 WG 重点事項 3. H29後期 AL 型授業実施アンケートコメント分析 4. H29年度 CS 合宿報告 5. H30前期 CS 導入状況 6. 学習ポートフォリオ導入指導報告 7. 学習ポートフォリオの開発について 8. その他 <ol style="list-style-type: none"> ①平成29年度大学改革推進等補助金実績報告書 ②「情報導入教育」における AL 要素実施について (報告) ③九州大学次世代型大学教育センター主催イノベーション教育セミナー「ファシリテーションを活かした学びの場づくり」案内
平成30年 6月4日 (月)	第2回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. FIT-AIM の活用について <ul style="list-style-type: none"> ・活用状況について (報告) ・Moodle のフォーラム機能を活用した情報共有について 2. AL 型授業における評価方法の開発とアセスメントポリシーの策定について 3. 授業外学修時間の調査について 4. 成果指標測定結果報告 <ul style="list-style-type: none"> ・H26～H29年度累積 GPA 状況 ・H29年度就職活動に関するアンケート結果 5. 学生 FD の活動について <ul style="list-style-type: none"> ・H30年度活動計画案 ・FD Café 開催計画「授業外での学習について」(6/18) 6. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① FDer 育成研修予定一覧 ②第5回 AP テーマ I 採択校協議会の開催 (7/3) ③チーム AP 合宿の開催 (9/10～9/11) ④九州大学次世代型大学教育開発センター教育イノベーションセミナー「アクティブラーニングの手法としてのケース・メソッドの活用」案内
平成30年 6月19日 (火)	第3回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. FIT-AIM の活用について 2. H30前期 AL 型授業アンケート調査 3. AL 型授業における評価方法の開発について 4. 授業アンケート分析 (AL 型授業との相関) 5. 授業外学修時間の調査について 6. CS 育成に関して明示すべき内容について 7. その他 <ol style="list-style-type: none"> ①大学教育再生加速プログラム (AP) フォローアップに係る実施状況報告書の提出について ② FD Café 実施報告 (6/18)

開催日	事項	議事
平成30年 7月24日（火）	第4回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. FIT-AIM の活用について 2. AL 型授業における評価方法の開発について 3. 授業外学修時間の調査実施報告 4. FD Café (6/18) 参加者アンケート報告 5. CS 経験学生の追跡調査 6. FIT-AIM 前期開発内容について 7. H30後期 CS 実施と H30前期 CS アンケート・雇用報告書について 8. H30後期 FIT Replay 活用について（案内） 9. その他 <ol style="list-style-type: none"> ①大学教育再生加速プログラム（AP）フォローアップに係る実施状況報告書の提出について ②採択校協議会参加報告（7/3） ③カリキュラム設計担当者養成プログラム（8/7～8/9）／九州大学基幹教育院次世代型大学教育開発センター「インスタラクショナル・スキルズ学修成果に基づく大学教育の展開に向けて」案内
平成30年 8月24日（金）	第5回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. AL 型授業における評価方法の開発について 2. 2018年度後期 CS 研修の実施について 3. AL 型授業アンケート回答状況について 4. H30前期 FIT Replay（授業アーカイブシステム）利用状況 5. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① FD Café の開催について（10/12）
平成30年 9月25日（火）	第6回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. FDer のあり方について 2. 2018年度前期 AL アンケート回答結果について 3. 2018年度前期 FIT-AIM 利用状況について 4. 授業アンケート分析 <ul style="list-style-type: none"> ・授業外学習時間平均 ・学生が実際に伸びたと実感できた力（DP 要素）の経年変化 5. CS 追跡調査 6. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① H30前期 CS 活動まとめ ② H30後期 CS 一覧 ③ AP テーマⅠ成果報告書の原稿について ④学生 FD 活動報告（学生 FD サミット参加、委嘱状交付式） ⑤2018AP シンポジウム @ 芝浦工業大学参加（10/26）
平成30年 10月30日（火）	第7回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生 FD 活動報告 2. FDer のあり方について 3. FDer の推薦について 4. 2018年度後期 FIT-AIM 利用状況について 5. FIT-AIM 機能変更箇所について 6. 2018年前期授業アンケート「学習時間平均」分析 7. 評価委員会開催報告（9/27） 8. CS 研修実施報告（10/3） 9. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① AP シンポジウム2018@芝浦工業大学参加報告（10/26） ②採択協議会とテーマⅠ・Ⅱ共同シンポジウムの参加について（11/24） ③ Q-conferene2018へのポスター発表参加について（12/22）

開催日	事項	議事
平成30年 11月27日（火）	第8回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. FDer の認定について 2. 卒業生調査の実施について 3. 2018年度後期 FIT-AIM 利用状況について 4. 2018年度前期 AL 型授業アンケートコメント分析 5. AL 事例集の作成について 6. 授業外学修時間の調査について（後期13週目授業） 7. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① FIT-Join キックオフミーティング開催報告（11/16） ② テーマⅠ採択校協議会およびテーマⅡシンポジウム報告（11/24） ③ 先進事例調査の実施について（11/29：宇都宮大学） ④ FD Café の開催について（12/17） ⑤ 評価委員会の開催について（3/27）
平成30年 12月17日（月）	第9回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. 卒業生調査の実施について 2. H30後期 AL 型授業実施アンケートについて 3. H31（2019）年度 CS 候補者募集と CS 事前研修 4. AL 事例集の作成について 5. 先進事例調査実施報告（宇都宮大学） 6. FIT-AIM の追加機能開発について 7. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① AP パンフレット原稿（日本学術振興会作成） ② AL 実践研究会開催について（2/25）
平成31年 1月29日（火）	第10回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. AP 平成30年度フォローアップ報告書について 2. 卒業生調査回答状況報告 3. 先進事例調査の実施について 4. H30後期クラス・サポーター雇用報告書と CS アンケート 5. FIT-AIM の追加機能開発について 6. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① 第6回 AL 実践研究会（教養力育成科目における AL 実践とその効果）開催について（2/25） ② 第7回 AL 実践研究会（新任教員ピア授業参観振り返り）開催について（3/4）
平成31年 2月26日（火）	第11回 FD 推進機構 教育技術開発 WG	<ol style="list-style-type: none"> 1. H30後期 AL 型授業実施アンケート回答状況 2. H31年度 CS 申請一覧 3. H30年度授業アーカイブシステム利用案内 4. H30年度 CS 合宿の実施について 5. その他 <ol style="list-style-type: none"> ① 第6回 AL 実践研究会実施報告（2/25） ② 第7回 AL 実践研究会（新任教員ピア授業参観振り返り）開催について（3/4）

3. AL テーマ報告会（平成30年度分）

第14回 FD Café「授業外の学修について話をしよう！～教職員＆学生懇談会」を開催しました（6/18）

6月18日（月）「授業外の学修について話をしよう！」をテーマに、第14回 FD Café を E 棟3階 FD セミナー室にて開催いたしました。

アクティブ・ラーニング（以下、AL）型授業では、学びを深めるため授業時間内だけでなく反転学習のように事前の講義内容の理解やディスカッションを行うためのリサーチなど授業外学修の重要性が高くなっています。今回のFD Caféでは、情報工学科 山澤一誠教授をファシリテーターとして、教員9名、学生8名、職員12名の合計29名が集まり、授業を受講している学生たちが授業外学修の重要性をどう捉え、どう取り組んでいるのか、学生と教職員との相互理解を深め、本学のAL型を中心に授業のあるべき展開を模索するため意見交換を行いました。

まず、教育技術開発WG長の松尾教授から挨拶があり、「今回は教員と学生で教育の中身や学び方について双方向で意見交換できる貴重な機会であること、今日のテーマである授業外学修時間はAL型授業を推進している中でポイントとしてPBLや反転学習などを取り入れているが、これらの取り組みは学生が力をつけることに有効なアプローチなのか、見直しも含めて検討し、教育の中身の充実によりつなげていきたい。」とのお話がありました。

グループワークに先立ち、学生FD（FIT-join）代表の豊福慶大さん（情報工学科4年）の進行で、教職員は「昔（学生時代）は〇〇でした」、学生は「将来〇〇になりたい」というコメント付きでグループ内の自己紹介が行われました。



教員・職員・学生合同チームによるグループワーク

本題では、山澤教授から授業外の学修の「位置づけ・目的」、授業外の学修について「する理由・しない理由」、FDとして「授業の改善（教員側）・その他の改善（学生・大学設備）」についてそれぞれグループで意見を出し合い、集約した意見を全体で発表し共有することが示され、学生と教職員合同の5名ごとにテーブルを囲んで、授業外学修について各自の考えや周りの学生の様子などをグループでディスカッションし、グループごとの発表と全体での質疑応答が行われました。



グループごとの発表では、授業外の学修の「位置づけ・目的」については、単位を取るため、効率よく授業を理解するため、授業の理解を深めるためといった自律性が低いものから高いものが発表されました。授業外の学修を「する理由・しない理由」については、する理由は課題提出のため、必要に応じて自分の興味に応じて調べ物をする、しない理由は授業で理解しているから、バイトなどで忙しい、授業外の学修を特に意識していないといったことが発表されました。最後に、授業の改善（教員側）やその他の改善（学生・大学設備については、授業外学修がなぜ必要なのか、そのレベル感をシラバスなどで具体的に示すこと、学生によって必要な学習量に差があるので、オーダーメイドのような授業支援を行うこと、FIT-AIM をどの授業でも活用し、学習習慣をつけさせること、まずは学生に自分がどのくらい理解しているのかを理解させること、授業が将来何に役立つかを説明し、授業に興味をもたせ、学生の意識を高めることなどが発表されました。

グループからの発表を受け、山澤教授から事前にまとめた表を元にお話があり、「みなさんから出していただいた意見と重なる部分が多かった。教員側として特に大切に思うことは『学生の心構え（マインドセット）の変革』であり、授業がおもしろい、役に立つと思わせることができたら成功ではないか。そのためには、授業の目的を常々伝えることや宿題やレポートをどこまでやればいいのか明確なハードル設定をすることが必要ではないか、AL 型授業とこの心構えの変革の接点について、引き続き教職員や学生と検討していきたい」との感想が述べられました。また、「学生が予習復習を気軽にできる環境やすべての授業が録画されるシステム、友達と相談できる環境づくりなどの検討も必要である」との意見がありました。



山澤一誠 教授

質疑応答では、先生から「実際に皆さん1授業あたり1週間どのくらい勉強していますか？」と質問があり、学生から「授業によって偏りがあるが、PBLのような課題解決型の授業では事前準備から時間をかけるので、1授業あたり5時間くらい行うこともある。以前はあまり授業外では学修していなかったが、PBLで人に教えることがある中で、内容を理解して臨むことの必要性を学び積極的に学修するようになった。」との回答がありました。また、先生から「授業外の学修をしない理由として、バイトが忙しいという回答があるがこれについてどう思いますか？」という質問については、学生から「バイトを理由にしているが結局は時間をうまく使うことができていないのが原因ではないか、効率的な時間の使い方を学ぶ機会や、支援するツールなどがあったら助かる。」との回答がありました。

最後に、FD 推進室の長谷川次長から、「議論の中で、授業外学修をしない理由は具体的なものが多いが、する理由はなぜしないといけないのかが個人によって理解が異なることが見えてきた。AL 型授業推進の目的に『能動的な学習態度の涵養』を掲げており、目の前の授業だけではなく、自分で主体的に学ぶことが広い意味でこれからの人生で重要だということが授業外学修につながってくるのではないか。自分で主体的に学ぶというマインドセットを学生が得られればと思っている。そのために今回の懇談会を一つの契機として、多くの学生に授業外学修の真の意味を伝えていければ、また、環境を整えていければと考えている。」との感想があり、ファシリテーターへの謝辞が述べられ、予定時間いっぱいでの閉会となりました。

平成30年度後期クラス・サポーター（CS）研修を実施しました（10/3）

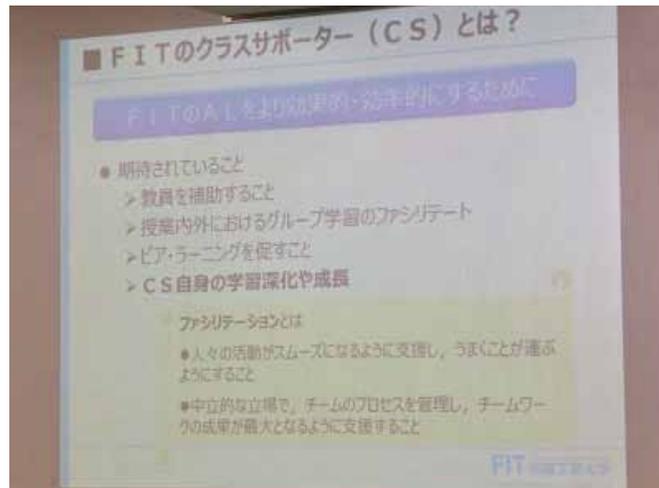
10月3日（水）、E棟3階R1教室にて、平成30年度後期クラス・サポーター（CS）研修を実施し、本年度（前・後期）CSとして活動を行う学生34名と、教職員6名が参加しました。これは「学びの促進者となるために」をテーマに、宮本知加子先生（FD 推進機構特任教員、教育技術開発 WG メンバー）がファシリテーターとなって実施したもので、「①日ごろ感じていることや不安に思っていることを共有し、協働した学びを体験する。②ファシリテーターとしての役割を確認し、今後の活動に活かすためのヒントを得る。③ CS 活動を通じた自らの学びを振り返り、自己の成長を確認する機会とする。」の3つを目的として実施したものです。例年2月～3月に、新年度の CS 候補学生を対象に CS 合宿を実施していますが、活動年度中に CS が一堂に会して活動を振り返り、経験や考えを共有するという取組は今回が初めてとなります。



宮本知加子 特任教員



研修は、場の緊張をほぐすアイスブレイクからスタートし、本学のアクティブ・ラーニング（AL）の定義や、AL 全学展開により「実践型人材」の育成を図ること、また CS が AL をより効果的・効率的にするために期待されていることやファシリテーションとは何かについて、確認が行われました。



続いてグループディスカッションに移り、参加者が3つのグループに分かれ、それぞれのテーマについて話し合いをし、グループでまとめた内容についてグループ発表が行われました。テーマは「A: (先生・学生との関係で) 困ったこと、思いと食い違ったこと、準備が必要だったことなど」、 「B: 自分の能力が伸びたと感じることで、できるようになったこと」、 「C: 今までのCSがいる授業において、CSが効果的だと感じる場面」の3つで、各グループ2人をCS役として選び、この2人が進行役となってグループディスカッションが行われました。



各グループとも活発な話し合いが行われ、当初予定されたディスカッション時間を延長して発表へと移りましたが、多くの参加者が積極的に発言をする姿が見られたほか、後期に初めてCS業務を担当する学生から、CS経験者に質問をする場面もあり、活動から得た経験や学びをCS同士が共有する様子が見られました。

グループ発表は、話し合いの内容をホワイトボードや模造紙にまとめて行われ、テーマAからは、専門科目ではCS自身の知識が不十分だったため、うまく質問に答えられないことがあったことから、前もって授業内容について予習する必要があること、授業担当教員と授業運営について予め打合せの時間を設けるのがよいこと、勉強しないといけないという意識を受講生に持ってもらうことが大事であることなどについて発表がありました。テーマBからは、CS活動を通じて相手のことを考える力 (字を綺麗に書く、相手のために怒ることができる)、や発表力 (人前で話をする、話をまとめる)、責任感 (遅刻しない、自身の勉強を頑張る、これらによる自身の日常生活向上) を身に付けることができたとの発表がありました。またテーマCからは、CSの効果として、CSが

補助的な立場としてグループワークに加わることで、グループ内で無意識に作られている壁が取り除かれ、雰囲気良くなることでディスカッションが円滑に進むことや、CSの存在自体が受講生の集中力を高めること、CS自身の経験・知識を活かし受講者の視点からサポートすることで、受講生の不安解消につながることも、またCSならではの距離感で受講生や担当教員と関係を持つことで、学生の理解度や本音などに関する教員の不安解消となることなどが発表されました。



グループ発表に続き、宮本先生からCS活動をする上で一番覚えておいて欲しいこととして、授業の主役は「受講生」であり、受講生の学びを促進するための役割を取ることで、授業のねらいは先生によってさまざまであり、CSとしてどのような動きが必要か、先生と話し合いながら進めること、「困り感」を持っている受講生もおり、受講生と先生の「繋ぎ役」になって欲しいことが伝えられました。また、授業で学びを促進するサポートとして、「進捗確認・相談」、「内省の促進」、「ポジティブフィードバック」、「目標設定」ということを意識し、ぜひ自身の活動にこれらを取り入れて欲しいことや、こうしたサポートが受講生のリフレクション（振り返る力）、エンジョイメント（楽しむ力）、ストレッチ（挑戦する力）がうまく循環することに繋がっていくとの話がありました。

また、松尾敬二学務部長（教育技術開発WG長）からは、CSは教員と異なる視点を持っており、授業での困りごとがあれば何でも教員に相談して欲しいこと、それが授業改善につながっていくことや、クラス全員がCSであるような積極的な雰囲気にも包まれた授業作りに力を貸して欲しいこと、そして、ぜひ教員と一緒に授業を作っていくことなどのメッセージが、参加者に伝えられました。

最後に宮本先生より、1年生からよく「あのCSの先輩はすごい」という話を耳にするというエピソードの紹介があり、大学生活全般において後輩が憧れるような存在として、次を育てていくような気持ちを持ってCS活動に携わって欲しいこと、こうした先輩後輩のつながりが、大学全体の授業の改善にもつながっていくということが、参加者に伝えられました。



松尾敬二学務部長（教育技術開発 WG 長）

第15回 FD Café「ルーブリックを活用した学修評価～主体性の育成に着目して～」を開催しました（10/12）

平成30年10月12日（金）、芝浦工業大学教育イノベーション推進センターより榊原暢久教授を講師にお迎えし、「ルーブリックを活用した学修評価～主体性の育成に着目して～」をテーマに第15回 FD Café を開催しました。

高等教育においては、「何を教えたか」から「何を学んだか」というパラダイム転換の必要性が言われ、成績評価についても多様な評価基準を設定することが求められています。本学においても、ディプロマ・ポリシーに定める要素として能力・態度が含まれており、その育成を各授業科目が連携しつつ担っています。本プログラムでは、成績評価の目的・意義から出発して、特に能力・態度の評価に深く関わるルーブリック評価についての基本的な考え方を理解し、ルーブリック評価表作成の基本を身につけることを目的として開催され、会場となった E 棟3階 R1 講義室には、28名の教職員（教員21名、職員7名）が集まりました。

まず教育技術開発 WG 長の松尾敬二教授（FDer）より開会の挨拶があり、現在本学はアセスメント・ポリシーの策定に取り組んでおり、DP の中で評価をすることが難しいいくつかの項目について、評価の基準の一つとなるルーブリックを取り上げたテーマであり、我々の取り組んでいる内容に非常に近く、有効な研修であるとお話がありました。



松尾敬二学務部長（教育技術開発 WG 長）

続いて榊原教授による「ルーブリック評価入門WS」へと移り、「今日のWSで持ち返りたいこと」をペアで1分間共有するアイスブレイクが行われた後、WSの3つの目標（①到達目標に基づく成績評価の基本について説明できる、②ルーブリック評価の意義と利点について説明できる、③ルーブリック評価表の素案を自ら作成できる）の説明がありました。

次にルーブリック評価の基本事項についてお話があり、学生が何を学習/学修するのかを示す観点と、学生が到達しているレベルを示す具体的な基準を示した「評価指標」であること、縦軸に複数の評価項目（観点）を、横軸にそれぞれの段階における典型的な状態を説明する記述（基準）をとるものであること、ルーブリック評価の背景には、明確かつ公平な評価基準およびテストだけではない評価方法の必要性が中教審の答申で示され、平成26年度からAP「テーマI(アクティブ・ラーニング)」、「テーマII(学修成果の可視化)」等の取組が開始されてきたこと等の説明がありました。また、そもそもルーブリックで何を評価するのかについて、各科目は学科の学位授与方針に、次に学部の学位授与方針に、さらに大学全体の教育理念・目標に、そして建学の精神に紐づき、到達目標や授業はこの逆向き設計が重要であること、そして各科目の評価を行う際の1つの判断基準は、建学の精神とDPにあるとのお話があり、また汎用的能力はALとの親和性が高く、汎用的能力の育成にはALが不可欠であり、その評価にはルーブリックが必要とのお話がありました。



芝浦工業大学教育イノベーション推進センター 榊原暢久 教授

また「学修成果 (competence)」と「学習成果 (learning outcomes)」の2つの違いについて、「学修成果」は学位プログラム（教育課程全体）を履修した総合的な成果として、学生が獲得することが期待されている知識・能力を抽象的に記述したものであり、直接測定することは想定されていないこと、一方で「学習成果」は学生が授業科目を履修した結果として修得することが期待されている具体的な知識や能力で、単位認定の根拠として、所定の学習期間内に達成可能であり、測定可能でなければならないものであるとの説明がありました。そしてルーブリックも、JABEE 認定基準の知識・能力項目 (a) ~ (i) を縦軸の評価観点とするような学修成果の評価を行うためのもの（汎用的ルーブリック、カリキュラムルーブリック、科目ルーブリック等）と、今回資料として配布されたような1回のレポート課題についての学習成果の評価を行うためのもの（課題ルーブリック）の2つに分けられることの説明があり、本WSの3つ目の目標「ルーブリック評価表の素案を自ら作成できる」では、課題ルーブリックに取り組むことし、実際に参加者が担当科目の課題ルーブリックを作成するワークに移りました。



作成にあたり、評価観点の設定は、(想定した)科目の到達目標、その下位目標を踏まえて設定すること、その課題での学びで想定している項目を分かりやすく、もれなく配置すること、各項目の比重(配点)を決めることにより、観点を明確化して学習内容を焦点化するようにとのお話がありました。また評価基準の設定は、達成度のレベル(3~5段階)ごとに、説明は長すぎず現実的かつ、学習内容に対して適切に、具体的なレベルの違いを示すことにより、学生と教員にとって到達度を示す指標になり、次に学習すべきことの指針になるとのお話がありました。またワークの作業時間が終了すると、各自設定した観点と基準を他の参加者とペアを組んで共有し、良いと思ったことや疑問に思った点を伝え合うなどすることで、ペアで話したことをもとに設定内容を改訂したり、色々なアイデアを持ち返ってルーブリックをさらに発展させる時間が設けられました。



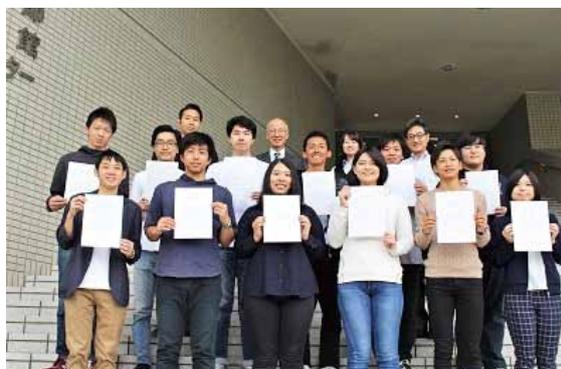
ワーク後、ルーブリックの利点として、学生の評価に関する行動指針が明確になること、学生が自らの学習活動を評価できること、結果だけでなく、プロセスも評価できること、評価のぶれが少なく採点時間が短縮できる一方で、詳細なフィードバックが可能になること、採点に係る教員のストレスの軽減につながるなどが確認されました。最後に、ルーブリックバンクの紹介があり、ルーブリックを初めて導入するにあたっては、まずはこうしたフォーマットをカスタマイズして使ってみるのが取り掛かりとして良いとのアドバイスがありました。WSを通じ、ルーブリック評価の背景と評価に関わる要点、ルーブリックの基本事項、実際の作成手順と観点・基準設定時のポイント、ルーブリック評価の利点について学び、またワークで実際にルーブリックを作成することで、参加者の担当科目でのルーブリック導入・活用に向けて弾みとなる研修となりました。

学生FD「FIT-join」の委嘱状交付式が行われました（10/22）

2018年10月22日（月）学長室にて学生FD FIT-join ※の委嘱状交付式が行われ、学生12名に下村学長より委嘱状が交付されました

福岡工業大学における学生FD活動は、本学の授業改善を教員・職員・学生の三位一体で改善・向上させようとする取り組み、およびそれに関わる活動です。今回は2018年度後期からの活動に向けて委嘱状の交付が行われました。

交付式では、下村学長より12名のFIT-joinスタッフへ委嘱状が手渡された後、代表の豊福慶大さん（情報工学部情報工学科4年）が、「学生と教職員をつなぐ活動によって、福工大の授業改善に寄与したい」との決意が述べられ、下村学長から「授業の受講者である学生の視点から気づくことを教職員に伝え、授業改善につながる活動を続けてください」とFIT-joinスタッフの活躍への期待が伝えられました。



今後、教員インタビューを冊子にまとめたFuture Design作成や学生同士での懇談会（Join-Talks）など授業改善に係る内容から2019年度新入生オリエンテーションの企画・運営といった活動に取り組んでいきます。

※ 「学生FD FIT-join」

本学における学生FD FIT-joinとは、本学の授業改善を学生の視点から教職員と一緒に考え、教職員と学生を“つなぐ”活動によって福岡工業大学での「学びのコミュニティづくり」の役割を担っています。

第16回FD Café「成績評価の妥当性と信頼性の向上～組織的な評価体制の構築に向けて～」を開催しました（12/17）

平成30年12月17日（月）、比較教育学・高等教育論を専門分野とされる筑波大学教育研究センター准教授の田中正弘先生を講師にお迎えし、「成績評価の妥当性と信頼性の向上～組織的な評価体制の構築に向けて～」をテーマに第16回FD Caféを開催しました。

今回は教育の質保証の基本となる成績評価について、その評価の妥当性と信頼性の向上に何が必要かを知り、本学における組織的な評価体制の在り方について考える機会とすることを目的とし、会場となったE棟3階R1講義室には、28名の教職員（教員17名、職員11名）が集まりました。

開会にあたり、下村輝夫学長から、本日の講演はステークホルダーの最たる学生と保護者にとって最も興味のある成績評価の客観性と厳格化についてのお話であり、本学における今後の取組に活かしたいとお話がありました。

続いて田中先生より、「成績評価の客観性および厳格化について～ガイドラインとアセスメント・ポリシーの策定～」をテーマに講演が行われました。まず本講演の目的として、日本では成績評価は大学教員の裁量にほぼ全て委ねられているため、評価基準が不統一、かつ曖昧であることが多く、よって学生の「学習到達度」（学士力）を適切に評価できず、社会の信頼を失いかねない状況にあること、そこで成績評価の妥当性と信頼性の向上のために「ガイドライン」に沿った組織的な評価の構築および実施の徹底を提案したいとお話がありました。また、成績評価に関する多くの大学の共通課題として、成績評価の結果にバラツキがあることが挙げられ、中央教育審議会答申（2008.12.24）では具体的な改善方策として成績評価基準の策定、成績評価の結果についての組織的な事後チェックの実施、学内教員以外の第三者の参画を求める仕組みの検討が明示されたことの説明がありました。また、改善のスリーステップとして、①成績評価基準を評価の「ガイドライン」として策定し、全教員で共有すること、②組織的な事後チェックとして、同僚評価を中核とする点検制度（全学的なアセスメント・ポリシー）を策定すること、③他大学教員等の第三者の参画が挙げられました。



筑波大学教育研究センター 田中正弘 准教授

続いてスリーステップの①成績評価ガイドラインについて、他大学のガイドラインの概要の紹介があり、最上位グレードの評価対象者割合の上限設定や、評価の極端な偏りの点検基準としてGPA 平均値との差分を目安とする方法など、相対評価の要素が取り込まれた事例等の説明がありました。またスリーステップの②アセスメント・ポリシーについて、文科省の「用語集」（2012）においては「学生の学修成果の評価（アセスメント）について、その目的、達成すべき質の水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針」と定義されているが、科目の学修成果（成績）の評価とする解釈と、学位プログラム全体における学修成果（学士力）の評価とする解釈との二つ

に分かれていること、ただし、両方の実施が望ましいとお話がありました。また、他大学のアセスメント・ポリシーの紹介があり、「機関（大学全体）レベル」、「教育課程（プログラム）レベル」、「科目（授業）レベル」の3段階で、また対象者を「入学生」、「在學生」、「卒業生」に区分する事例の紹介があった他、岩手医科大学のアセスメント・ポリシーに、評価方法の選定と合格基準の設定にあたり「その妥当性、客観性ならびに実現可能性を考慮し」との記載があることの紹介があり、「正解」がない困難な作業ではあるが、教員間で「妥当性」のあるレベルを探し、共有するということの重要性、また自学の学生の学力を把握した上で、授業の到達目標に達成できるかという実現可能性を意識して授業設計を行うことの重要性についてお話がありました。



また、文科省は DP、CP、AP の作成を義務化する一方で、アセスメント・ポリシーは努力目標としてきたが、私学助成金の配分項目に追加された動きにも見られたように、いずれ義務化されることは容易に想像できるとのお話がありました。

また、厳格な成績評価を実施するにあたり、到達度評価を行うための「授業の目的（GIO）」と「達成目標（SBOs）」の設定方法や、科目の難易度（SBOs）を学生に知らせるツールとしての科目ナンバリングの紹介、点検のための評価として「プログラムレビュー」（機関レベルで5～7年ごとに実施）および「モニタリング」（プログラム・科目レベルで毎年実施）の説明がありました。

続いて、本学のガイドラインとアセスメント・ポリシーに触れられ、ガイドラインにおける「主体性ルーブリック」について、主体性の評価にしっかりと取り組む大学は珍しく、このチャレンジを支持したいというコメントの他、ルーブリック以外での評価方法も模索しても良いとのアドバイスがありました。またアセスメント・ポリシーについて、「機関（大学全体）レベル」、「教育課程（プログラム）レベル」、「科目（授業）レベル」という他大学の事例にも多い3段階に、本学は「学生」レベルが設けられている点について、独自性が高く、ぜひ他大学にも広めて欲しいというコメントがありました。また、学科単位で設置される授業科目レベルの評価組織について、形式的にならないよう、その構成員を学科所属教員に限らず、他学部他学科に所属する教員、学問分野を同じくする他大学の教員、学科に所属する学生、学科の卒業生を多く受け入れる企業関係者（ステークホルダー）など、第三者の参画について提案がありました。

続いて行われた質疑応答の中では、到達目標を設定するにあたり共通認識を持つという考え方について、科目ナンバリングに関して他学科間で同一名称科目がある場合の識別方法について、授業

科目レベルの評価に公正性を持たせるための組織づくりのポイントについてお話がありました。また、主体性の評価方法について、ポートフォリオ以外にどのようなアプローチがあるのかという質問があり、主体性をはかるのは非常に難しく研究対象の一つであること、今までに経験がない評価対象となるので、今はっきりとした答えを示すことはできないこと、今後は本学の成績評価ガイドラインで示された主体性ルーブリックについても試行錯誤を重ね、改善していくのがよいとのお話がありました。また、絶対にやってはいけないのは、主体性が到達目標の中に記されているにも関わらず、それについて何の評価もしないということであり、何とか皆さんでやっていかないといけないとのお話がありました。



最後に、教育技術開発 WG 長の松尾敬二教授（FDer）より挨拶があり、成績評価に対する課題意識は他大学と同じであると感じたこと、本学のガイドラインとアセスメント・ポリシーについて多くのコメントや課題について指摘頂き、まずアセスメント・ポリシーを形作っていく段階にある本学にとって大きな支援になったとの謝辞が述べられ、閉会となりました。

第6回 AL 実践研究会を開催しました（2/25）

平成31年2月25日（月）、本学 E 棟3階 R1 教室にて「教養力育成科目における AL 実践とその効果」をテーマに第6回 AL 実践研究会を開催しました。教養力育成科目におけるアクティブ・ラーニング授業の実践報告をするとともに、その教育効果や専門教育への繋がりに等について議論する場とし、教員23名、職員9名の計32名が参加しました。

開会に際し、教育技術開発 WG 長の松尾敬二先生より、本学における教養力育成科目は AL を基軸としながら、ポリシーに到達するように意識をして本学の共通教育として育てていくこと、また今後の本学の教育の一つの在り方について示していただける機会となることを期待しているとのご挨拶がありました。次に、教養力育成センター長の阿山光利先生より、教養力育成科目のカリキュラム概要について、教養力育成科目の基本的な考え方や専門教育科目との有機的連携等についてお話しがありました。



阿山光利 教授



中野美香 准教授

続いて、授業実践報告として、①「知と教養」②「Advanced English」③「ウェルネス基礎」の3科目についての報告と質疑応答がありました。

- ① 「知と教養」について社会環境学科の中野美香先生より、講義概要として、前期選択科目で5名の教員により週3コマ行われ、計327名が受講、基礎期（第1・2回）は全体講義、応用期（第3～10回）は学部混成の4クラスに分かれ多様なテーマについてリレー講義を行い、発展期（第11～15回）では教員ごとに設定されたテーマを選んでクラスを分け、最後は全体でのポスター発表を通じてクラスの学びを共有したことの報告がありました。

また、授業の中での工夫として、ディスカッションでは議論を通して他者を知的資源として捉えることや異なる意見を尊重することなどの大切さを伝え、授業後には FIT-AIM に講義の感想や自分で興味のあるテーマを決めて意見を入力させているなどの報告がありました。またアンケートでは各項目において、良い変化があったと答えた学生が多数を占めていたとの報告がありました。質疑応答では、興味を持たせることや知識をどう広げていくかという質問に対して、知識を広く広げていくことは学習者の性格に依存するところもあるので、近接する範囲で知識を深め、広げていくことにより、少しずつでも確実に知識として構築していくことになるとのお話がありました。

- ② 「Advanced English」について社会環境学科の土屋麻衣子先生をはじめとする英語教員 WG より報告がありました。昨年からはじめた「Advanced English」は1、2年生それぞれ75名程の上位者クラスであり、対話性 & 双方向性をキーワードとして授業初めのアイスブレイクディスカッションやペアワーク、グループワークを行っていることや、セルフリサーチとプレゼンテーションについて、具体的な内容の報告がありました。特にペアワークやグループワークでは自己原因性（自分の存在で周りに影響を与えること）を創出するために、なるべく教員が関わり情報をフィードバックすることが大切であるとお話がありました。また、成果と課題として、CASEC のスコアが上昇傾向であること、アンケートではモチベーションは伸びたが主体性の伸びが少なく、継続的な短期目標の設定が必要であるとの報告がありました。質疑応答では、自動翻訳ソフトなどが普及する現在における英語教育について質問があり、心と心の通い合いや伝わったという喜びが大切だと思ふとお話がありました。



土屋麻衣子 教授



樋口貴俊 助教

③ 「ウェルネス基礎」について社会環境学科の樋口先生より、健康やウェルネスという概念、評価の方法、授業計画の具体的な内容、特にワークブックを用いた授業内容の記録と振り返りをさせていること、自身の健康・体力に関する課題解決型のレポート課題についてルーブリック評価とフィードバックを行っていること、チームビルディングの方法などの報告がありました。また学期末アンケートの結果から、ウェルネスに関する学びとして、健康・体力への意識、コミュニケーション能力、対人スキルを高めることができたなどの項目で肯定的な意見が多数を占めているとの報告がありました。質疑応答では、今年度から必修科目として「ウェルネス基礎」を受講している情報工学部の受講生の状況について質問があり、アンケートの結果から、運動・スポーツに苦手意識がある学生でも、同科目を受講して良かったと回答した学生が多数を占めたとのお話がありました。

最後に、社会環境学科の池田賢治先生をファシリテーターとして、質疑応答と全体議論が行われました。

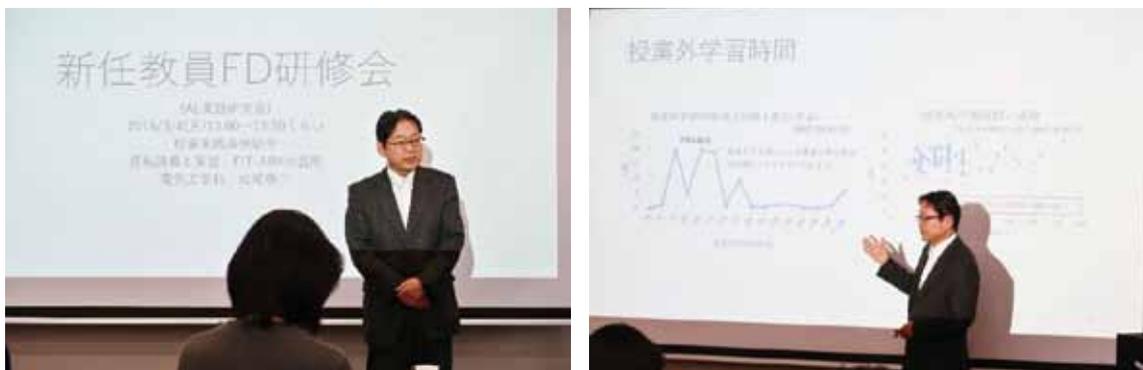
短期的な集中力を持って課題にどう取り組ませるのかという問いに対して、自己調整をする力を学生に身に付けさせること、そのためには教員からのフィードバックを行い、達成感を持たせることが大切であるとのお話がありました。またアクティブ・ラーニングのキーワードは、学生が授業に対して自分のことと思えるような授業運営をすることであり、今後の課題として量と質の問題、色々な手法を組み合わせながら学生に気付かせる仕掛けをしていくことの必要性が示されました。

閉会に際し、次期教養力育成センター長の土屋麻衣子先生より、今後も議論を重ね、福岡工業大学としての高度な深い教養に沿えるような良いものにしていきたいとのお話がありました。

第7回 AL 実践研究会を開催しました (3/4)

3月4日(月)、E棟3階FDセミナー室にて、新任教員FD研修会(AL実践研究会)を開催いたしました。本取組は、本学に採用後3年以内の専任教員および参加を希望する教職員を対象に、本学のFDの取組について理解を深めてもらうとともに、授業改善への意欲を高めてもらうこと、学内教員間のネットワーク作りのきっかけを得ることを目的として毎年開催されており、今回は9月に実施した研修会のピア授業参観の振り返りを行いました。

今回の研修会では、新任教員8名の他、教職員7名の計15名が参加しました。まず教育技術開発WG長でありファカルティ・デベロッパー(以下FDer)の電気工学科の松尾敬二教授から自身で取り組んだ反転講義の成果報告がありその後、FDerの社会環境学科の藤井洋次教授がファシリテーターを務め、新任の先生方が本学に着任してからの授業の振り返りを行うグループワークが行われました。



松尾敬二 教授 (教育技術開発 WG 長)

松尾教授から、福工大に着信した頃は講義の内容が学生に本当に伝わっているのだろうかといった疑問を感じ、新たに取り組んだ独自プリントとプロジェクターの連携等の授業における改善を重ね、現在は反転講義の導入を行っていることが報告されました。現在取り組んでいる電子回路Iでの授業実践の報告があり、学生の学習意識を高めるため、十分な事前学習を必要とする反転講義をベースに、授業ではグループ学習を行い、グループ学習の促進サポートにCSを導入、学生が学んだことを体感できるよう実習、実験を取り入れることによって、学生の成績分布が反転講義(AL型授業)の導入前後で広がり狭まり高位に移動したこと、試行錯誤の結果が学生の学ぶ姿勢に反映していることを実感したとの報告がありました。

授業は受講者の理解度を反映した内容でなければならない、受講者の力を利用して理解を深めることも重要であり、今後はより、個々の授業改善と学科のカリキュラムとの整合性が求められるとのお話がありました。

続いて、藤井教授がファシリテーターとなって、新任教員が本学に着任後実施した授業の振り返りについてワークを織り込んだ研修が行われました。



藤井洋次 教授

まずは、2つのグループに分かれ、ピア授業参観と後期授業の振り返りをテーマとし「取り組んだ点や工夫した点」、「ピア授業参観で参考になった点や取り入れたい活動」、「上手くできなかった点」、「こんなことに困っている」といった点について付箋に書き出し、順に発表してグループ内で共有しました。次にグループ内で挙がった意見について、授業運営の課題に対してグループ内で互いに解決策やアドバイスを伝えるワークを行いました。最後に、「学生の知識・技能を高めるために、主体的な態度を涵養するために」をテーマとし、グループ内で共有しました。各グループで活発な意見交換や発表の様子が見られました。



藤井教授から、「自分が教員になったころは相談できる方が限られていたが、今年着任された先生方は縁あって同じ年に着任されたので、ぜひ積極的に情報共有して頂きたい。自身が受けた教育を同じように学生に教えてしまいがちだが、時代の変化に合わせて改善が必要になってきているので、先生同士で課題を共有し互いに高めあってほしい」とお話がありました。

質疑応答では、参加教員から「この機会を通じて、学科を超えて話ができて良かった。学科は異なっても課題は同じであることを感じた。問題意識を共有したことで、解決策に向けて今後考えを共有していきたい。」と述べられました。また、「ピア授業参観を行ったが、新人同士よりベテランの先生方と新人の先生で行い、ベテランの先生の意見を頂いた方が良いのではないか。」と意見がありました。それについて、松尾教授からはその視点は大切である、藤井教授からは新任同士だと分野も異なり意見を述べるのも難しい面もあるので、今後検討したいとの回答がありました。

文部科学省 大学教育再生加速プログラム（テーマⅠ）

福岡工業大学
AL 型授業推進プログラム
平成30年度 事業報告書

平成31年3月発行

[編集・発行]

福岡工業大学

FD 推進機構 FD 推進室

〒811-0295 福岡市東区和白東3-30-1

電話 092-606-7370

Fax 092-606-7379

<http://www.fit.ac.jp/ap>

Email o-fd@fit.ac.jp

